スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2019年 157号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 157 July 2019

研究の最前線

◆　2019年度夏期国際シンポジウム　◆
「民主主義の世界的危機？ 権威主義とポピュリズムの台頭と進化」開催

センターは2019年7月4～5日に、標記の夏期国際シンポジウムを開催しました。これは科研費基盤研究(A)「権威主義とポピュリズムの台頭に関する比較研究」(代表:宇山智彦) を中心とし、同基盤研究 (B)「ポストネオリベラル期における新興民主主義国の経済政策」(代表：仙石学) も協力しながら企画されたものでした。

第４セッションの質疑

権威主義とポピュリズムの台頭は今日の世界政治の中で大きな注目を集めている現象ですが、両者の間にどのような関係があるのか、これらが世界全体あるいは先進国の民主主義にもたらす脅威はどの程度なのかについては見方が分かれています。今回のシンポジウムでは、1990年代からラテンアメリカと東欧のポピュリズムを研究しているクルト・ヴァイラント氏、世論調査など大量のデータを駆使して政治的価値観の長期的変化や政治体制とガバナンスの関係の変化を論じているロベルト・ステファン・フォア氏、ロシアと中国の権威主義体制を新しい観点から比較しているキャサリン・オーウェン氏といった論客を多く集めました。対象地域は欧米、中国、日本、ラテンアメリカなどを含みましたが、報告の約半数は旧ソ連・東欧諸国に関するものでした。これは、旧ソ連・東欧がセンターの研究対象であるというだけでなく、再権威主義化や「非

リベラル民主主義」化の例を多く提供している地域であることに由来しており、旧ソ連・東欧研究が比較政治学の中で果たすべき重要な役割が再確認できました。

シンポジウムの論点は、概念の定義や研究の方法論から、具体的な国・地域での特徴的な現象に至るまで多岐にわたりましたが、全体としては、安定した綱領に基づく政党の役割が行き詰まってリーダーシップが個人化する傾向が多くの国に見られることを指摘しつつ、それを政治家個人の問題として片付けるのではなく社会全体や国際社会との関わりの中で検討する報告が多くなされました。参加者の意見も多様でしたが、権威主義とポピュリズムの台頭の原因について、経済危機や各国の文化的背景による安易な説明を退け、安全保障、主権、歴史的経験といった問題と関連づけて緻密に分析すべきであること、権威主義やポピュリズムの影響についても、指導者が政治体制そのものを変えることに成功した例と失敗した例の双方を視野に入れる必要があること、経済などの政策との関係における複数のパターンを認識すべきことについては、概ね共通理解が形成できたように思います。

第 6 セッションの報告

参加者は実数で79人、2日間の延べ人数で125人にのぼりました。センターは今年度、スタッフの減少や大幅な交替という問題に直面していますが、それにもかかわらず関係者の献身的な努力で、シンポジウムの運営はスムーズにできたことを特筆しておきます。［宇山］

Global Crisis of Democracy?
The Rise and Evolution of Authoritarianism and Populism

会場：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター大会議室（403）使用言語：英語

July 4 (Thu)

9:30－9:40	Opening Remarks
9:40-12:00	Session 1. Approaches and Perspectives in Empirical Analysis of Populism

Masaru Nishikawa (Tsuda University) "Was the People's Party in the United States Really Populistic?"

Bruno Castanho Silva (University of Cologne) "Never Mind, I'll Find Someone Like Me: The Relationship between Perceived Representation and Populist Attitudes"

Toru Yoshida (Hokkaido University) "Is Populism Really Absent in Japan? An Institutional Approach to Its Regional Politics"

Discussants:**Takeshi Hieda** (Osaka City University) **Xavier Mellet** (Waseda University)

Chair: **Akihiro Iwashita** (SRC)

13:15-15:15	Session 2. Internal and International Aspects of Authoritarian Politics in Post-Soviet States

Thomas Ambrosio (North Dakota State University) "Hereditary Grooming in the Former Soviet Union: An Authoritarian Strategy for Patronal Presidential Regimes"

John Heathershaw (University of Exeter) "Transnational Uncivil Society: A Framework for Discussion from Eurasia and Beyond"(co-authored with Alexander Cooley, Columbia University)

Tomohiko Uyama (SRC) "Authoritarianism and Nationalism in Central Asia: Do Political Regime and Foreign Relations Correlate?"

Discussant: **Timur Dadabaev** (University of Tsukuba)

Chair: **Takeshi Yuasa** (Sophia University)

15:30-17:30 Session 3. Sources of Authoritarianism and Its Governing Capacity

Roberto Stefan Foa (University of Cambridge) "The Authoritarian Challenge: Democratic Legitimacy in Post-Authoritarian States"
Roula Nezi (University of Surrey) "Authoritarian Legacies and Their Effect on Political Attitude Formation"
Tomoki Kamo (Keio University) "Groping for a Better Way: The Relationship between the CCP and Society"
Discussant: **Takeshi Kawanaka** (Institute of Developing Economies, JETRO)
Chair: **David Wolff** (SRC)

July 5 (Fri)

10:15-11:45 Session 4. Transformation of Authoritarianism in Russia and China

Atsushi Ogushi (Keio University) "Russian Deputy Ministers: Patrimonial or Technocratic Elites?"
Catherine Owen (University of Exeter) "Participatory Authoritarianism: From Bureaucratic Transformation to Civic Participation in Russia and China"
Discussant: **Yuko Adachi** (Sophia University)
Chair: **Mari Aburamoto** (Hosei University)

13:15-14:45 Session 5. Comparative Populism: Eastern Europe and Latin America

Kurt Weyland (University of Texas at Austin) "Populism's Threat to Democracy: Comparative Lessons for the U.S."
Yusuke Murakami (Kyoto University) "'Populism' in 21st Century Latin America"
Discussant: **Takeshi Hirata** (Tohoku University)
Chair: **Tadayuki Hayashi** (Kyoto Women's University)

15:00-17:00 Session 6. Populism and the Economy

Manabu Sengoku (SRC) "Populist Governments and Economy: Differences between PiS and FIDESZ"
Pavol Babos (Comenius University) "Economic Populism in Central Europe: Comparing the Czech Republic and Slovakia"
Licia Cianetti (Royal Holloway, University of London) "Re-reading Democracy's Hollowing and Backsliding through the Baltic Prism"
Discussant: **Akira Uegaki** (Seinan Gakuin University)
Chair: **Shinichiro Tabata** (SRC)

17:15-18:00 General Discussion

Moderator: **Tomohiko Uyama** (SRC)

◆ 公開講座 ◆
「再読・再発見：スラブ･ユーラシア地域の古典文学と現代」開講

今年度の公開講座は、旧ソ連・東欧の文学に焦点を当てました。とりわけ、各地域で「古典」として知られている作品の再読を通じて、また作品が書かれた背景や歴史を分析することで、これまでになかった作品の読み方や魅力について、多角的に論じるものでした。したがって、講師は文学者が中心となりましたが、歴史学者や言語学者も参加し、それぞれの視点から「古典」を論じました。聴講生の数は50人弱と例年に比べてやや少なめでしたが、講義後の討論は充実したものになったと思います。なお、本講座の内容は、本講座の講師を務めた安達大輔氏（センター）および小椋彩氏（東洋大学）の編集による啓蒙書として刊行される予定です。講義題目と講師は以下の通りです。［野町］

第１回	５月 10 日（金）	カザフ文学とイスラーム世界：近代遊牧社会にとっての古典とは何か	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 宇山　智彦
第２回	５月 13 日（月）	トルストイ『戦争と平和』の戦争観・歴史観をめぐって	北海道大学／中央学院大学教養学部 望月　哲男
第３回	５月 17 日（金）	ゴーゴリの手―『鼻』から「手」を考える	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 安達　大輔
第４回	５月 20 日（月）	Ｋ・チャペックの『ロボット』を読み直す	実践女子大学文学部 国文学科 ブルナ・ルカーシュ
第５回	５月 24 日（金）	ユーゴスラヴィアとポスト・ユーゴスラヴィアの文学―多文化空間の語り部たち	東京大学大学院 人文社会系研究科 三谷　惠子
第６回	５月 27 日（月）	19 世紀文学のポストモダン的再読とその後：プルス『人形』とトカルチュク『人形と真珠』	東洋大学文学部 日本文学文化学科 小椋　彩
第７回	５月 31 日（金）	「方言文学」から「古典文学」へ：スラブ系少数民族文学再考	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 野町　素己

◆　センター一般公開開催される　◆

高橋助教のサイエンス・トーク

今年の当センター一般公開は、「もっと楽しい！スラブ・ユーラシア」と題して行いました。晴天に恵まれて北大祭全体に人が大勢集まったこともあり、過去最高を更新した前年度（469名）の来場者を上回る、延べ508名の方にお越しいただきました。

一般公開では、センタースタッフによる最新の研究成果に関する展示とサイエンス・トークを行い、大人から子どもまで楽しめるスラブ・ユーラシア地域の小物・工芸品の展示を行いました。例えば、ユーラシア各地で古くから遊び道具に用いられてきた羊の距骨を使用したモンゴルの占いや、サイエンス・トークと連関させてサハリン関係の映像資料の上映を行いました。また、昨年度同様、本年度もロシアとウクライナ、ウズベキスタン、そしてロシアの少数民族ニブフの民族衣装をトルソーに着せて立体的に展示しました。スラブ・ユーラシアの観光地を背景にした顔出しパネルも設置し、来場いただいた多く方から好評をいただきました。

サイエンス・トークは、高橋美野梨助教による「開発とグリーンランド独立：いま、北極で起きていること」と、岩下明裕教授・中山大将講師（釧路公立大学）による「ゴールデンカムイのサハリン島」の2本立てで行われました。昨年はロシアをテーマに、その来し方と現在をめぐるトークが展開され、ロシアという一国の奥行きを知る構成でしたが、今年はスラブ・ユーラシア

地域の広がりを知る機会となりました。高橋助教は、近年の気候変動に伴い活況の様相を見せる 資源開発産業と、それを下支えにして独立を果たそうとする北極の島グリーンランドの「いま」を解説しました。岩下教授・中山講師は、日露戦争後の北海道を舞台に始まり、いまやその舞台を樺太にまで広げたマンガ『ゴールデンカムイ』を導きの糸としながら、樺太・サハリンの歴史を解説しました。サイエンス・トークが終わった後も、質問に並ぶ人がたくさんいました。

クルグズスタン出身の大学院生ミルランさんが
帽子をかぶって説明役に

本行事は5研究所・センター合同一般公開の枠組の中で行われましたが、幹事役を務めた電子科学研究所をはじめ、共催した他の研究所に深く感謝申し上げます。［高橋］

◆ 長縄宣博教授が第8回三島海雲学術賞を受賞 ◆

受賞作『イスラームとロシア』

センターの長縄宣博教授が、第8回三島海雲学術賞を受賞しました（プレスリリース：https://www.mishima-kaiun.or.jp/news/8.html）。

同賞の人文科学部門は、日本をのぞくアジア地域の歴史を中心とする人文科学に関する研究で単著の学術書を出版した45歳未満の研究者に対して授与されるもので、長縄氏は博士論文をもとにした著書『イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏1905-1917』（名古屋大学出版会、2017年）によりこの賞を受賞しました。同書に関しては、ロシア帝政末期のヴォルガ・ウラル地域におけるムスリム社会の変容、特にロシアの近代化の過程において形成された「ムスリム公共圏」について詳細な検討を行い、この地域におけるムスリム共同体の形成と発展に関して、従来の帝国対ムスリム社会というステレオタイプ的な見方とは異なる新たな視点を提起したことが評価されました。同書は帝政ロシアを主たる対象とした研究ではありますが、この賞を受賞したことで、アジアの歴史研究としても秀逸な研究であることが認められたかと思います。氏の研究の、今後のさらなる発展を期待いたします。［仙石］

◆ 「ブリティッシュ・コロンビア大学との交流事業」により ロシア文学の国際シンポジウムを開催 ◆

2019年3月3日から10日にかけてブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）人文学部のKatherine Bowers助教およびErvin Malakaj助教をSRCに招へいし、他大学の研究者と協力して札幌・東京で国際シンポジウムを行った。これは北海道大学「ブリティッシュ・コロンビア大学との交流事業」の一環である。きっかけはUBCのSanta J. Ono学長と交流の深いSRCの野町素己教授が、以前

センターでの記念撮影

からの知り合いである同大学のBowers助教を筆者に紹介してくださったことである。Bowers助教は共編者としてケンブリッジ大学出版から*Russian Writers and the Fin de Siècle: The Twilight of Realism*を公刊するなど国際的に活躍している有力な若手研究者であり、筆者もかねてより交流を望んでいた。専門はゴシック文学やドストエフスキーで、*A Dostoevskii Companion*を2018年に出版しているほか、北米ドストエフスキー協会の委員も務めている。メールで連絡を取ったところ、今回の事業計画や将来の交流について大変ポジティヴなお返事をいただくことができた。筆者とは近代ロシア文学と感情や情動の関係という共通の研究テーマがあることがわかったため、ドストエフスキーを中心とする19世紀ロシア文学における感情表現をテーマに札幌と東京で国際シンポジウムを開くことで意見の一致を見た。さらに近代ドイツの文学・文化（主に映画）やメディア論、感情・情動の問題を研究しているMalakaj助教を報告者としてご紹介いただいたことで、シンポジウムに比較文化論の視点を導入できるようになった。

札幌でのシンポジウムは3月5日15:00-18:10、SRC大会議室にて、「19世紀文学における感情の問題：ドストエフスキーから始める」と題して行われた（使用言語：英語、通訳なし）。Bowers, Malakaj両氏のほかSRCから越野剛共同研究員（当時）及び筆者が報告を行ったほか、コメンテータを望月哲男北大名誉教授、司会・開会の言葉を野町教授にそれぞれお願いした。

東京では乗松亨平准教授（東京大学）の協力を得て、3月8日14:00-17:10に東大駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム2にてシンポジウムを開催する運びとなった（英語、通訳なし）。「ロシア・ドイツ・日本文学における感情の比較研究に向けて」というテーマのもと、UBCの両名のほか、報告者として番場俊教授（新潟大学）・平松潤奈准教授（金沢大学）、コメンテータとして野中進教授（埼玉大学）にご参加いただくことができた（司会・開会の言葉は筆者）。

シンポジウムでは、ドストエフスキー作品における感情表現と火事や貨幣といったモチーフの関係の分析、そして18世紀以降のゴシック文学から始まってロシアの劇作家オストロフスキイ、ドイツの作家ラーベ、日本の夏目漱石等との比較といった、多様で高いクオリティの報告と活発な討論が行われた。札幌と東京の報告•討論では方法論や問題意識の上で鮮明な違いが見られ、幅広い視点から議論できたことは大きな収穫である。Bowers, Malakaj両氏は両会場での報告・議論に感銘を受けた様子で、北大のドストエフスキー研究の厚みとレベルの高さ、東京会場での理論的な志向の強さとその洗練が印象的だったと口をそろえていた。

結果としては、北大をはじめとする日本とカナダのトップレベルのドストエフスキー研究者が集まり、感情・情動という新しい切り口から議論を行うとともに、日・露・独・英の比較文学研究としても価値の高い、国内でも先駆的な試みとなったと自負している。スラブ文学・文化研究に果たしているカナダの研究者の重要な貢献にもかかわらず、この分野において日本国内で継続的な交流を行っている研究教育機関はない。比較文学の高度に専門的な国際集会をカナダのトップ大学と共催することもほぼ前例のないものであるため、SRC発の国際的な学術交流として今回の事業は大きなインパクトを持った。札幌での開会あいさつの際には、司会の野町教授によってUBCのOno学長からのメッセージ動画が紹介された。そこでは、これまで理系中心だった北大とUBCとの研究交流事業において、今回UBCで初めて人文学部の比較文学の企画が実現した

ことが高く評価されるとともに、今後の交流の継続・発展に対して大きな期待が寄せられた。今回の事業の意義が北大・UBC両大学にとっていかに大きなものかがわかる。

ICCEESの2020年大会はカナダ・モントリオールで開かれるが、Bowers, Malakaj両助教とはこの大会を含め今後も研究交流を継続・発展させてゆくことで合意している。今回の事業が、SRC・UBCの協力関係を基盤としたスラブ・ユーラシア・北米地域を対象とする文学・文化研究の国際的ネットワーク構築につながることを期待したい。最後に、この事業のきっかけをつくっていただいたOno学長と野町教授、研究面だけではなく明るく知的な人柄でも魅了してくれたBowers, Malakaj両助教、大変なスケジュールの合間を縫ってご参加いただいた司会・報告・コメント担当の先生方、事業申請時にご推薦いただいた北大の安藤厚名誉教授、望月哲男名誉教授、大西郁夫教授、そしてご協力いただいたすべての皆様に御礼を申し上げたい。［安達］

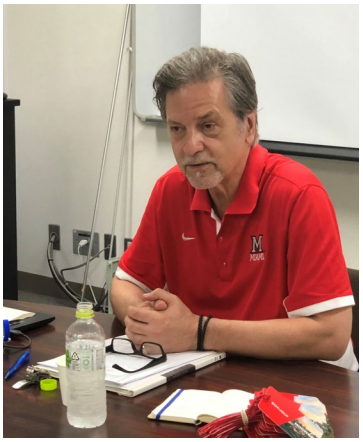
動画でメッセージを寄せる UBC の Ono 学長

◆　ICCEES副会長アンドリイ・クラフチュク氏のSRC訪問　◆

去る7月2日、ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）の副会長アンドリイ・クラフチュク氏が来札された。6月29日～30日に東京大学で開催された第10回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会への出席が氏の主な来日の目的であったが、この機会を生かし、予てからクラフチュク氏が希望していたSRC訪問も併せて実現された。これは同大会の組織委員長で、クラフチュク氏を招へいした池田嘉郎氏（東京大学）のご厚意により行われたものである。

クラフチュク氏はサドベリー大学（カナダ）で教鞭をとる著名な宗教学者である。ウクライナを主な対象としており、この分野で多くの国際的な業績をあげている。加えて、ご所属の大学では2004～2009年に学長を務められ、ICCEES運営委員には2010年に加わり、2015年から副会長の役を担われている。研究者としても一流であるが、マネージメント能力にも秀でていることは、2015年以来ICCEES運営委員会で氏に定期的にお目にかかる筆者もよく感じるところである。

今回のSRC訪問の目的として3点挙げられる。1点目は、SRCとICCEESの関係強化である。これまでも木村汎氏や松里公孝氏といったSRC関係者がICCEESの日本代表として携わってきたが、2015年幕張大会以降、SRCがICCEESの国際情報局を担当するなど、関係がより強化されたと言える。東アジア大会が順調に行われることからもわかるが、スラブ・ユーラシア研究における東アジアの存在感は日々強まっている。この文脈において、クラフチュク氏と仙石センター長と意見交換が行われ、氏からは今後もSRCがスラブ・ユーラシア研究を国際的にけん引することが求められた。2



ウクライナの宗教の現状を論じる
クラフチュク氏

点目は、SRCの研究者との交流である。これを目的にクラフチュク氏の講演会が組織された。講演題目は『なぜロシアはウクライナの正教会を教派分立と呼ぶのか』というものであった。今日の激動するウクライナには人文学・社会科学にとって興味深いテーマが見いだせるが、中でもウクライナとロシアの政治状況に直接的に連動する宗教問題は、信者の所属教会の移動をはじめとしたさまざまな変化を引き起こしている点において特に興味深い。本講演会の後でも、歴史学者、文化人類学者など、さまざまな研究者から質疑が行われ、実に充実した意見交換の場になったと思われる。3点目は、2020年に行われるICCEESモントリオール大会の案内である。講演会ののちにクラフチュク氏よりモントリオール大会の意義や目的が講演会参加者に説明された。氏によると、モントリオール大会では特に若手研究者向けの様々なサポートが実現できるよう取り計らわれているので、日本からもますます多くの若手参加者が望まれるとのことであった。

一泊二日の短い札幌滞在であったが、クラフチュク氏の目的は概ね果たされたように思われる。また、空いた時間には札幌観光も楽しまれたようである。［野町］

◆　共同研究員　◆

2019年度からセンター共同研究員になっていただく方々は以下の通りです（各カテゴリーの中では五十音順）。特に断り書きがない方々の任期は2年間です。2018年度から2年任期の共同研究員については、センターニュース第153号をご覧ください。［事務係］

共同研究員（一般）

①任期：2019年4月1日～ 2021年3月31日（2年間）

赤尾光春（関西学院大）、秋山徹（早稲田大）、油本真理（法政大）、阿部賢一（東京大）、飯尾唯紀（東海大）、池田嘉郎（東京大）、諫早勇一（同志社大／名古屋外国語大）、井潤裕（北海学園大）、井上まどか（清泉女子大）、岩﨑一郎（一橋大）、岩本和久（札幌大）、上垣彰（西南学院大）、植田暁（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、海野典子（日本学術振興会特別研究員）、大串敦（慶應義塾大）、大塚夏彦（北大北極域研究センター）、大西富士夫（北大北極域研究センター）、大野成樹（旭川大）、岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、岡部赳大、小川佐和子（北大文学研究院）、小澤実（立教大）、貝澤哉（早稲田大）、加藤有子（名古屋外国語大）、金山浩司（九州大）、神竹喜重子（日本学術振興会特別研究員）、亀山郁夫（名古屋外国語大）、木村護郎クリストフ（上智大）、久保慶一（早稲田大）、小松久男（東洋文庫）、小森宏美（早稲田大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、左近幸村（新潟大）、佐々木史郎（東京国立博物館）、佐藤圭史（北海道医療大）、佐原徹哉（明治大）、塩川伸明（東京大）、篠原琢（東京外国語大）、志摩園子（昭和女子大）、下里俊行（上越教育大）、白岩孝行（北大低温科学研究所）、新免康（中央大）、朱永浩（福島大）、醍醐龍馬（小樽商科大）、高尾千津子（東京医科歯科大）、高倉浩樹（東北大）、高橋沙奈美（九州大）、巽由樹子（東京外国語大）、田畑朋子、地田徹朗（名古屋外国語大）、月村太郎（同志社大）、鶴見太郎（東京大）、徳永昌弘（関西大）、鳥山祐介（東京大）、中井遼（北九州市立大）、中澤敦夫（富山大）、中田瑞穂（明治学院大）、中地美枝（北星学園大）、長友謙治（農林水産省農林水産政策研究所）、中村唯史（京都大）、長與進、根村亮、野田仁（東京外国語大）、野中進（埼玉大）、野部公一（専修大）、乗松亨平（東京大）、橋本聡（北大メディア・コミュニケーション研究院）、服部倫卓（ロシアNIS貿易会ロシアNIS経済研究所）、濱本真実（東洋文庫）、林忠行（京都女子大）、番場俊（新潟大）、平田武（東北大）、平松潤奈（金沢大）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、樋渡雅人（北大公共政策学連携研究部）、

福田宏（成城大）、藤嶋亮（國學院大）、前田弘毅（首都大東京）、松嵜英也（津田塾大）、松里公孝（東京大）、松戸清裕（北海学園大）、溝口修平（法政大）、三谷惠子（東京大）、道上真有（新潟大）、宮崎悠（北海道教育大）、六鹿茂夫（霞山会）、望月恒子（北大）、森下嘉之（茨城大）、八木君人（早稲田大）、谷古宇尚（北大文学研究院）、湯浅剛（上智大）、横手慎二（慶應義塾大）、吉村貴之（東京大）

②任期：2019年4月1日～ 2020年3月31日（1年間）

上原良子（フェリス女学院大）、小椋彩（東洋大）、久保庭眞彰（一橋大）、古宮路子（日本学術振興会特別研究員[1]）、塩谷哲史（筑波大）、杉浦秀一（北大メディア・コミュニケーション研究院）、中野潤三（鈴鹿大）、沼野充義（東京大）、藤澤潤（神戸大）、松澤祐介（西武文理大）、山脇大（三菱UFJモルガン・スタンレー証券）、ヨフコバ四位 エレオノラ（富山大）

共同研究員（地域比較）
任期：2019年4月1日～ 2021年3月31日（2年間）

秋田茂（大阪大）、小沼孝博（東北学院大）、辛嶋博善（人間文化研究機構）、ガンバガナ、草野大希（埼玉大）、高本康子、武田雅哉（北大文学研究院）、平野千果子（武蔵大）、松本ますみ（室蘭工業大）、水谷智（同志社大）、山根聡（大阪大）、吉田徹（北大法学研究科）

共同研究員（境界研究）
任期：2019年4月1日～ 2021年3月31日（2年間）

安溪貴子（山口大／山口県立大）、石井明（東京大）、今井宏平（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、今野泰三（中京大）、岡洋樹（東北大）、北川眞也（三重大）、北村嘉恵（北大教育学研究院）、金成浩（琉球大）、小池康仁（一般社団法人与那国フォーラム）、樽本英樹（早稲田大）、中居良文（学習院大）、中山大将（釧路公立大）、ブル・ジョナサン・エドワード（北大メディア・コミュニケーション研究院）、前田幸男（創価大）、益尾知佐子（九州大）、舛田佳弘（北海商科大）、山﨑幸治（北大アイヌ・先住民研究センター）、山本順司（北大総合博物館）、吉見宏（北大経済学研究院）

1. 前号に掲載した2019年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」採択者一覧で、古宮氏の所属機関・職に誤りがありました。訂正してお詫びします。［編集部］

◆ 2019年度中村・鈴川基金奨励研究員決まる ◆

2019年度中村・鈴川基金奨励研究員は以下の2名の方に決定しました（五十音順）。［編集部］

氏　名	所　属	予定滞在期間	専攻分野・研究テーマ	ホスト教員
菅原　彩	早稲田大学大学院文学研究科博士課程	2019.9.11 ～ 9.24	コズロフの『修道士』初版におけるセンチメンタリズム的要素と当時の物語詩受容	安達
鳥飼　将雅（まさとも）	東京大学大学院法学政治学研究科博士課程	2019.9.17 ～ 9.27	ロシアにおける連邦政府、地方政府、市郡政府間の三層関係の変遷 1991 年 -2018 年	宇山

◆　2019年度科学研究費プロジェクト　◆

2019年度にセンター教員・研究員が代表を務める日本学術振興会科学研究費助成事業は以下の通りです(「学振特別研究員奨励費」及び「研究成果公開促進費(学術図書)」を除く)。[事務係]

基盤研究（A）	
宇山　智彦	権威主義とポピュリズムの台頭に関する比較研究（2018-21年度）
David Wolff	戦後北東アジアにおける歴史的分岐点のマルチアーカイブ分析（2019-23年度）
野町　素己	新コーパスに基づくカシュブ語文法の多階層的研究（2017-21年度）

基盤研究（B）	
長縄　宣博	暴力による民主主義の２０世紀：トランスナショナルヒストリーの試み（2018-22年度）
安達　大輔	ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究（2019-23年度）
仙石　学	ポストネオリベラル期における新興民主主義国の経済政策（2016-19年度）
兎内　勇津流	シベリア出兵と東アジア国際環境の変動（2019-22年度）

挑戦的萌芽研究	
野町　素己	セルビアにおけるバナト・ブルガリア語の現状および言語変化に関する研究（2016-19 年度）

挑戦的研究	
高本　康子	旧日本陸軍遺品資料における「大陸」諸宗教表象の研究（2017-19 年度）

若手研究	
斎藤　慶子	帝政期・革命期ロシアのジャポニスム・バレエ　歴史・美学・政治（2018-21 年度）
伊藤　愉	1920 年代後半ロシア演劇における「ファクト」の概念と方法論的展開の考察（2019-21 年度）
村上　智見	中央ユーラシア出土品からみた古代の染織品流通と技術伝播に関する研究（2019-22 年度）
高橋　美野梨	北極グリーンランドにおける科学と在来知の調和と背反をめぐる政治学的実証研究（2019-22 年度）

若手研究（B）	
加藤　美保子	クリミア編入以後のロシアのアジア外交：中国中心主義から多角化への移行とその問題（2017-20 年度）
安達　大輔	19 世紀ロシア文学における言語と身振りの関係についての総合的研究(2015-19 年度)

◆　専任研究員セミナー　◆

5月24日：岩下明裕「進化するボーダースタディーズ：私たちの現場とツーリズム」

コメンテータ：木村崇（京都大学名誉教授）

今回のペーパーは『境界研究』第9号（2019年）に掲載済みで、報告者によれば「これまでや

ってきた様々な実践的研究が一つの到達点に来たと考え、その舞台裏や方法論について模索してきたことをまとめたもの」でした。コメンテータは、理論と実践を結合させ、遠く離れた自治体群のネットワークを発展させた「イワシタボーダー学」を高く評価し、さらなる発展への期待を表明しました。他の出席者からは、日本の地方の国際化との関係、外国の自治体との交流の可能性などについての意見が出ると同時に、社会は本当にこうした研究・実践を求めているのか、ボーダースタディーズに携わる若手は評価されるのかといった批判的なコメントもありました。これらに対する報告者の詳細なリプライで、ボーダースタディーズが持つ多方向の作用についてさらに理解が深まりました。［宇山］

5月30日：仙石学「ポピュリズム政権の経済政策：ヴィシェグラード諸国の比較から」

コメンテータ：平田武（東北大学）

本セミナーに提出されたペーパーは、東欧のヴィシェグラード4国において、ポピュリスト的な政党が政権を維持していることにかんがみ、その経済政策の相違を主として国内政党間の政策をめぐる対立と連携によって説明したものでした。これに対して、コメンテータの平田教授から、1）ポピュリズム概念の分析上の有用性、2）ハンガリーの経済政策をネオリベラルと位置付けることの是非、3）各政党に関するマニフェスト・プロジェクトの使い方について突っ込んだ議論がありました。他の出席者からはヴィシェグラードにこだわる理由、経済政策と政治の結びつき、政権維持と支持ターゲットの相違の連関などについて質問が出ました。比較対象の枠組みを設定し、その中から争点を抽出し、関係性を巧みに分析する、仙石比較政治学のエッセンスの醍醐味が味わえるセミナーでした。［岩下］

◆　研究会活動　◆

ニュース第156号以降、センターで行われた研究会活動は以下の通りです。［宇山］

3月1日　UBRJ 公募プロジェクト型共同研究報告会　川久保文紀（中央学院大）「ボーダーツーリズムの可能性とその限界」
第29回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　岩下明裕（SRC）「安倍政権のロシア外交を問う！」

3月5日　国際シンポジウム「The Problem of Emotion in Nineteenth-Century Literature: Dostoevsky, Other Writers and Beyond」 Katherine Bowers (ブリティッシュ・コロンビア大、カナダ) “Dostoevsky’s Gothic Novel: The Mechanism of Fear in *The Idiot*”; 越野剛 (SRC) “Illness and Fire: Rethinking a Nastasia’s Emotional Behavior in *The Idiot*”; Ervin Malakaj (ブリティッシュ・コロンビア大、カナダ) “On Narrative Efficacy and Boredom in Late-19th-century German Fiction”; 安達大輔 (SRC) “Emotion, Body and Subjectivity: Discourse on the Suicide’s Body in Ostrovsky’s *The Storm*”

3月11日　SRC特別セミナー「Policy Process and Social-Economic Structure in Russia and Ukraine」 Fabian Burkhardt (高等経済学院、ロシア) “Performance Management and the Implementation of Landmark Executive Orders: Evidence from Russia’s 2012 May Decrees”; Inna Melnykovska (中欧大、ハンガリー) “Capital Mobility, Big Business and the Transformation of Crony Capitalism in Ukraine”

3月16日　北海道中央ユーラシア研究会第133回例会　井上岳彦（大阪教育大）「魚は羊の代わりになるのか：17 ～ 19世紀におけるカルムィク人の牧地問題について」

4月23日　SRC特別講演会　Sarah Thomason (ミシガン大、米国) “Doing Fieldwork on Endangered Dialects and Languages: The Former Yugoslavia and Montana”

6月14日　第30回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　高橋美野梨（SRC）「北極グリーンランドにおける非生物資源開発と独立問題」

6月18日　SRC特別セミナー「Scaling Up: From the Baltic States to the World」 Simonas Strelcovas (シャウレイ大、リトアニア) “Four Seasons in Lithuania (1939-1940): Internees – Refugees – Foreign Legations and Ch. Sugihara” ; Rotem Kowner (ハイファ大、イスラエル) “From the Baltic States to the World: Consul Sugihara and the Refugees’ Escape”

6月27日　SRC特別セミナー　Vladimir Popov (文明対話研究所、ドイツ) “Industrial Policy in Post-Communist Countries”

7月2日　SRC特別講演会　Andrii Krawchuk (サドベリー大、カナダ) “Why does Russia call the Orthodox Church in Ukraine schismatic?”

7月11日　北海道スラブ研究会　諫早庸一（SRC）「時をわたるモンゴル：13・14世紀ユーラシア、彼らは暦の統一を企てたのか」

人事の動き

◆　助教の就任・退職　◆

本年4月1日をもって、**諫早庸一**さんがセンター助教に就任されました。諫早さんは神戸大学大学院人文学研究科および東京大学大学院総合文化研究科において中央ユーラシアの前近代史およびモンゴル帝国史を研究され、2015年に論文「一なる天、異なる宙：モンゴル帝国期ペルシア語中国暦の研究」により博士号を取得されました。その後はヘブライ大学研究員、学振特別研究員（RPD）などを経て、この4月からセンターで勤務されています。研究対象とする領域の一つが科学史で、この領域では文理協働の研究も進められています。［仙石］

高橋沙奈美助教、菊田悠助教、油本真理助教は3月31日に退職し、他大学に転出されました。斉藤慶子助教は学術研究員となりました。［事務係］

◆　学術研究員紹介　◆

ファベネック，ヤン　2019年4月9日に就任
研究テーマ：オホーツク海域及びその沿岸地域をめぐる現代の地政学的課題

前学術研究員のビタバロヴァ，アセリさんは3月31日に退職されました。［事務係］

◆　2019年度外国人招へい教員（外国人研究員）決定　◆

2019年度の外国人招へい教員（外国人研究員）は、センターおよび北大での二段階選抜を経て、以下の5名の方になりました（姓のアルファベット順）。北大での職名は特任教授または特任准教授となります。

2020年度の外国人研究員公募は、学内の外国人招へい教員募集のスケジュールが早くなったため、2019年8月23日締切となりました。詳しくはセンターのウェブサイトをご覧ください（http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/fvfp/）。［宇山］

ドブレンコ，エウゲーニ・アレクサンドロヴィチ（Dobrenko, Evgeny Aleksandrovich）
本籍機関・職名：シェフィールド大学言語文化学部ロシア・スラブ研究科　教授
研究テーマ：言葉の帝国：ソビエトの多民族文学と帝国的想像力
滞在予定期間：2019年9月1日～12月27日
受入教員：安達

ガリポヴァ，ロザリヤ（Garipova, Rozaliya）
本籍機関・職名：ナザルバエフ大学　准教授
研究テーマ：シャリーアとロシア帝国：ヴォルガ・ウラル地域における家族法と移りゆく法理解
滞在予定期間：2019年9月1日～12月27日
受入教員：長縄

ゴルバチョフ，ヤロスラフ・ヴラジミロビッチ（Gorbachov,Yaroslav Vladimirovich）
本籍機関・職名：シカゴ大学人文学部言語学科　助教授
研究テーマ：中世ノヴゴロドの識字と学校教育
滞在予定期間：2019年9月10日～2020年3月27日
受入教員：野町

コロリョフ，ヘンナディー（Korolov,Gennadii）
本籍機関・職名：ウクライナ国立科学アカデミー歴史研究所　上級研究員
研究テーマ：東欧・中欧における連邦主義構想：イデオロギー的ユートピアから現実政治へ（1863-1921）
滞在予定期間：2019年9月1日～12月27日
受入教員：宇山

ルービンス，マリア（Rubins, Maria）
本籍機関・職名：ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）スラブ東欧研究スクール　教授
研究テーマ：中東の文化・地政学的コンテクストにおけるロシア語イスラエル文学
滞在予定期間：2020年1月1日～2020年3月27日
受入教員：安達

◆　2019年度の客員教授・准教授　◆

公募していました客員教授・准教授は審査の結果、次の8名の方々にお願いすることになりました。［事務係］

氏名	所属	研究テーマ
伊藤　庄一	一般財団法人日本エネルギー経済研究所 戦略研究ユニット	ロシアの対欧州エネルギー戦略の新展開：市場力学と地政学の相克
ブフ・アレクサンダー	University of Victoria of Wellington, School of History, Philosophy, Political Science & International Relations	China's Productive Power and National Identities in Thailand and South Korea
秋山　徹	早稲田大学高等研究所	中央アジア現代国家の歴史社会的動態：ライフヒストリーとメディア分析を中心に
井出　晃憲	稚内北星学園大学情報メディア学部	稚内から北方ユーラシア世界を俯瞰する～国境観光による地域振興と人的交流拡大についての考察～
大串　敦	慶應義塾大学法学部	ウクライナ危機後のウクライナ政治エリートの再編
加藤　有子	名古屋外国語大学外国語学部	スタニスワフ・イグナツィ・ヴィトキェーヴィチの戯曲、小説におけるセクシュアリティと植民地主義言説
醍醐　龍馬	小樽商科大学商学部	北海道から見た日露経済交流史
道上　真有	新潟大学経済学部	ロシア都市住宅市場の発展についての研究

◆　事務職員の異動　◆

徳永　浩則　　研究支援推進員　2019年4月1日採用
五十嵐　麻美　事務補佐員　　2019年7月1日採用

小谷内　千尋　研究支援推進員　2019年2月28日退職
中嶋　奏子　　事務補佐員　　2019年3月31日退職
中川　裕子　　事務補佐員　　2019年6月30日退職

成澤顕久事務長（法学研究科）は他部局に転出し、後任として徳山雅一事務長が2019年4月1日に着任しました。

金山みどり事務補助員は2019年4月1日から事務補佐員になりました。［事務係］

札幌に7か月滞在して

トマシュ・ヴィヘルキェヴィッチ（アダム・ミツキェヴィッチ大学
／センター 2018年度外国人特任教授）

「教授資格論文［habilitation］以後に新しい研究生活が始まる」－私が属するポーランドの学界では、いまだにこの学位が研究者の成熟度の尺度として考えられる。これは陳腐な言い方なのだが、私の場合には、実際に教授資格を得てから、学術的に新たな時代が始まった。

二風谷アイヌ博物館にて

大変ストレスがかかる手続きを経て（またその前には大病を経験したのだが）、2016年6月、私は第6回国際ポーランド研究者会議（ポーランド、カトヴィツェ）のパネルセッション「マイノリティと地域言語」に招待された。イオランタ・タンボル教授によって組織され、ゲルト・ヘンチェルが司会を行ったこのセッションで、私は日本のスラブ語学者である野町素己氏と知己を得、関心領域が重なる野町氏と私はすぐに意気投合した。そして同年12月、彼の招待により、スラブ・ユーラシア研究センターの冬期国際シンポジウム「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義の多様化を再考する」に参加し、研究報告を行った。その報告に基づく論文「ポーランドの少数話者言語：1989年以降の接触と変化の動態」は*Acta Slavica Iaponica*第39号に掲載されている[1]。

北海道大学スラブ（・ユーラシア）研究センターや札幌とのつながりは、上記が初めてというわけではなかった。アルフレッド・マイェヴィッチ教授の弟子である私は、「ブロニスワフ・ピウスツキの研究の復元と評価に関する国際委員会」の背景と成果を調査する機会を得ていたからである。これはピウスツキが1902～3年にサハリンと北海道でアイヌ語とアイヌ・フォークロアを記録した蝋管の内容の復元を最重要目的として北海道大学にて行われた研究成果である[2]。今回北海道大学博物館で、このかつてのプロジェクトに関する、小さくも非常に情報豊かな展示を発見して、私は大変うれしく思った。私自身の思い出やピウスツキの足跡を胸に、週末になると私はゆかりある地域を数多く訪問した。札幌に来てから最初のイベントは、「ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念：講演と映画と朗読の集い～ポーランド、サハリン、北海道～」であった[3]。この機会を通じ、私は北海道ポーランド文化協会の代表者やゲストと知り合うことができた。

しかし、今回の私の研究滞在は、ピウスツキ研究ではなかった。それでも、アイヌ研究、アイヌ関係の地域政策、アイヌ語・文化復興活動などが私の関心を引いたことは言うまでもない。また、私は稚内（および忘れられないほど美しい利尻島・礼文島）訪問は、1991年私のサハリン滞在を思い起こさせた。その時は、サハリンの南端から北海道を見ようとしたのだが、北海道は私にとって「未知の大地」であった。

私の札幌での7か月は、日本の大学に滞在するという言い尽くせぬ夢を実現するもので、そのテーマとして社会言語学、言語政策、およびマイノリティ研究を選んだ。世界でよく知られたスラブ・ユーラシア研究センターとのコンタクトは、私の長期研究プロジェクトを開始するのに最も有意義なものとなった。私が外国人研究員プログラムに応募するとき、私は研究題目を「社会言語学、言語接触および言語政策から分析する中・東欧の文字、書記体系および正書法」とした。従って、私の研究の中心は（そして日本での私の講演会のいくつかは）歴史社会言語学、言語政策研究的観点による文字と社会の相関に関する研究となった。この研究を実行するのに、野町氏の研究業績および関心領域は大変刺激になった。そして北大とSRCの設備、またシェヴェロフ文庫などは大変役に立った。

私はSRCでの最初の講義を2018年7月30日にロシア語で行った。その題目は「民族・宗教的

1　http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/acta/39/pp.%2045–69.pdf

2　Majewicz, Alfred F. 2013. “Why? Unveiling a monument to B. Piłsudski in Shiraoi.” Hokkaidō University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP - https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/53486

3　http://hokkaido-poland.com/events/CentenialB.Pilsudski2018.pdf

周辺および言語的小規模コミュニティとしてのポーランドのロシア古儀式派」であった。難しいテーマであったが、私は自身の研究成果および当該領域の最新研究成果をまとめて報告した。

9月には、札幌学院大学の白石英才氏が私の講演会を組織してくださった。題目は「方言と言語の間で：ヨーロッパにおける地域傍系言語」であり、これは私の教授資格論文のテーマであった[4]。私はその後ヨーロッパ以外でも「地域傍系言語」の概念を用いることができるか、大いに関心を持っている（そしてその一部は1月の沖縄での諸講演で開陳した）。

11月には、私のSRCでの研究成果の一部を公開そして討論するのに最適なチャンスが巡ってきた。上智大学ヨーロッパ研究所およびSRCが共催したシンポジウム「言語にとって文字とは何か」にて、私は「書くことと文字によるアイデンティティ獲得」という講演を行ったのである[5]。このイベントの責任者であった木村護郎クリストフ氏には深く感謝したい。また同月において意義深かったのは、名古屋外国語大学で加藤有子氏が組織した国際シンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶：ホロコーストと原爆を起点とする比較的アプローチ」に参加したことである。他のイベントでも感じたが、特にこのイベントのおかげで、ポーランドと日本の学術的つながりがいかに強く、実り多く、未来志向であるかということを確信した。

また札幌のポーランド語話者コミュニティの活発さ、日本国内でのネットワークの維持と拡大の努力は特筆に値すると思う（小樽や北見も含まれる）。この点においてラファウ・ジェプカ助教（北大）およびエディタ夫人、松家仁教授（小樽商科大学）の役割は素晴らしい。私はあらゆる在外ポーランド・コミュニティが、彼らのような優れたリーダーがいればいいのにとすら思う。

SRCの定例のシンポジウムは、学術的に見て国際的にまさにトップクラスのイベントである。12月、広い意味でのスラブ学者20人余りが冬期国際シンポジウム「帝国・ブロック・連邦にそびえる言語 1918-2018」に集った。シンポジウムの3日間は、最も充実した意見交換の機会となった。このイベントでの出会いにより、すでに新しい共同研究なども始まっている。このシンポジウムは、私に2件の報告機会（「ラトビアの独立とラトガリア言語問題」および「自由と束縛の文字：中・東欧の長き20世紀における文字計画と言語イデオロギー」）を与えてくれたのみならず、私の研究計画プロジェクトについて、世界トップクラスの専門家と意見交換することができたのである。

SRCは学術的なイベントに満ちていた。個々のセミナーや講演会が多く組織されていることは言及に値する。マーク・L・グリンバーグ教授（カンザス大学）、ゲルハルト・ネヴェクロフスキ（ウィーン大学）といった世界的に傑出した学者、また有力若手研究者アレクサンドラ・ヤロシュ博士（コペルニクス大学／日本学術振興会外国人特別研究員［琉球大学］）などの講演会が印象に残った。

2019年の年明けは、札幌は実に寒く雪が多かったが、私は沖縄での講演旅行を行うことになった。講演は琉球大学沖縄言語研究センターおよび沖縄国際大学南島文化研究所で行われた。いずれも、ヨーロッパにおける地域言語・島嶼言語の特性について論じたものである。両講演会の組織をしてくださった西岡敏先生（沖縄国際大学）、當山那奈先生（琉球大学）、打越正行先生（沖縄国際大学）に感謝申し上げたい。この沖縄滞在を通じて、さまざまな琉球語研究の専門家と知己を得た。言語記録、社会言語学的フィールドワーク、言語復興プロジェクトなど実に多様で興味深いものがあった。

滞在の最後には、北見工業大学のミハウ・プタシンスキ教授が私を講演会に招待してくださ

4 Wicherkiewicz, Tomasz 2014. *Regionalne języki kolateralne Europy – porównawcze studia przypadku z polityki językowej*. Poznań: Rys.

5 https://www.sophia.ac.jp/jpn/event/2018/itd24t000001ylbx-att/20181110.pdf

り北海道北部の真冬を感じることができた。ここでは「復興のための言語記録」という題目で講演を行った。雪と氷に包まれた忘れがたき北見、網走、オホーツク海の風景は、北日本の自然が大変美しくと豊かであることを私に徹底的に教えてくれた。

私にとってまさに自然な関心事である、自然の印象についても書いてみよう。私が着任してからしばらくすると日本は猛暑を迎え、そのインパクトは北海道でさえも感じられた。しかし美しい山々は涼しく、その快適さは札幌市内からも遠くない。そのため、ハイキングや山登りにはもってこいである。しかしながら、私のSRCでの夏と秋の思い出として、理解不能な風習にも言及しなければならない。それは私の研究室の窓の下で毎日のように行われるテニスの試合である。正直に言って、研究者コミュニティが、どうしてあのように大きな声でテニスをすることを許すのか、理解不能である。あの声は、集中して学術研究に取り組むのに不快な妨げとなった。

テニスのシーズンが終わると、私は色彩に富んだ秋の生活を送ることになった。北海道は10月、関東は11月である。大雪山国立公園で味わった紅葉（もみじ）や紅葉狩りは生涯忘れることはないであろう。北海道大学のキャンパスや他の札幌近郊の自然公園で経験した自然の万華鏡も同じく忘れがたいものとなった。

札幌芸術の森での自然風景と彫刻の調和を感じることで、私は2018年9月の、北海道では珍しい、あの強烈な台風21号とその直後に起きた恐ろしい北海道胆振東部地震から立ち直ることができた。9月5日・6日の夜は、心底恐怖に怯えた。その後の日々は、この自然災害がいかに北海道中の人々にとって苦しい経験となったのかということを示したのである。札幌と私も含むその住人は、電気や水の供給なしで過ごさねばならず、その後も食料の供給も限られていたように思う。多くの外国人は外界との接触を断たれることにもなった。頻繁な余震（あるいは冬期には吹雪）が続くこの疎ましい自然災害を通して、日本人の毎日の現実がいかに脆弱なものであるか、いかに他の、我々の小さな問題が、アジア・太平洋の視点からすると、どうでもよく見えるかが理解できたような気がする。このとき、私はもっと日本語を話せたら良いのに、と感じた。というのは、情報の多くは日本語のみで発信されていたからである。

概して、北海道の冬はなかなかのものであった。昨年は初雪がだいぶ遅かった（12月半ばであった。通常は11月初旬だという）。非常に不安定な気温によって、道路脇の路面が思いのほか凍っており、転びそうになることもあった。北海道の山の冬景色、雪のトンネル、オホーツク海の流氷は大変印象的であった。また、雪の種類も一様ではなく、イヌイットが雪の種類に対して様々な異なる語彙を使うという、有名な言語学的な神話を思い起こさせた。私はアイヌ語にもきっと同じように雪を意味する語彙はいくつもあるのだろう。きっと日本語の北部の方言でもそうなのだと思う。

大変驚いたことに、この滞在で私は春の日々を経験することもできた。私の沖縄訪問のことである。ここで私は自然時計を大幅に巻き上げ、今帰仁村で1月にお花見を楽しむことができた。北海道から沖縄までの旅行は、日本列島における緯度の差が極めて大きいことを感じさせた。

真の自然愛好家として、私は日本の景色、気候、植物相、動物相の多様性に驚きを感じた。また言語学者として、日本列島の民族言語的な多様性に強い印象を受けた。これらの多様な経験は、私の日本における学術的な経験に素敵な彩を与えてくれた。そして、私の素晴らしい北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターでの研究滞在にさらなる価値を与えてくれた。私は生涯決してこの滞在を忘れないだろう。

（英語から野町訳）

サラ・トマソン教授による連続講義について

野町素己（センター）

筆者は、科研費で関係しているミシガン大学の言語学者サラ・トマソン教授をお招きし、京都大学（2019年4月17日）、東京大学（4月21日）、北海道大学（4月23日）にて合計3回の講演会を組織した。トマソン教授は世界的な言語学者で、とりわけ歴史言語学、言語接触論、アメリカ先住民言語の優れた研究者として知られている。数多くの著作を上梓しているが、中でも3冊の著書*Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics* (Terrence Kaufmanと共著, 1988)、*Language Contact: An Introduction* (2001)、*Endangered Languages: An Introduction* (2015)は、いずれも当該領域の重要なハンドブックとして広く参照されている。また米国で最も重要な言語研究誌である*Language*の編集長（1988-1994）を務められ、また複数の言語学会の会長を歴任するなど、世界的に重要な役割を果たしてこられた。

北海道大学博物館でのトマソン氏

現在、トマソン氏はカナダ・北米西部で話されるセイリッシュ語族の研究を行っているが、キャリア初期はスタンフォード大学でゲルマン語学・印欧比較言語学を専攻し、博士課程はイェール大学にて、アレクサンダー・シェンカー教授の指導のもとでスラブ語学、とくにセルビア・クロアチア語研究に取り組んだ。なぜスラブ語学を専攻したかというと、トマソン氏は歴史言語学のための方言調査を行いたかったからだそうである。もともとの専門のゲルマン語学は方言学が非常に発達していたため、先行研究の整理だけでも非常に困難でありフィールド調査から得られるものに限界を感じられたが、それに比べるとスラブ諸語はまだ外国人も入り込める余地があると思ったからである。そこで、西側の研究者が比較的自由に調査ができるスラブ語圏として旧ユーゴスラヴィアをフィールドとした。そしてノヴィ・サド大学に留学し、セルビア・クロアチア方言学で当時既に権威的な地位を有していたパヴレ・イヴィッチ教授に師事し、セルビア・クロアチア諸方言の接尾辞の研究で博士号を取得した。したがって、トマソン氏は本格的なトレーニングを積んだスラブ語学者でもある。余談だが、私がこのことを知ったのは2012年であった。ウェイルズ・ブラウン氏（コーネル大学）に会いにイサカを訪問した時、ブラウン氏宅の本棚にトマソン氏の博士論文を見たときである。博士号取得後はイェール大学でスラブ語学の講師として数年勤務したが、その後、言語接触研究、ピジン・クレオール研究に取り組むようになった。もちろん、この分野の研究に新たな関心を持ったからだが、それ以外にも副次的な理由が複数あったようである。トマソン氏によると、当時の米国のスラブ語研究は彼女には受け入れがたい「男世界」であり、またヨーロッパから移住した研究者と学生の間には、非米国的な独特な距離感があったそうである。また、別の理由として、その頃著名なスラブ語学者エドワード・スタンキェヴィッチ教授がシカゴ大学からイェール大学に移り、トマソン氏とある種の競合ができたことも挙げられると話しておられた。しかし、トマソン氏はその後もスラブ語学自体には関心を持ち続けており、他のフィールドを専門とすることで、言語分析の理論面の幅が広がり事例の種類も大きく増えた。これは、トマソン氏の著作からもうかがい知れることではある。

今回の来日では、改めてスラブ諸語を考えて直す良い機会ということで、特に第2回と3回はス

ラブ語の事例も含め、合計３回の講演会が実現した。題目は以下の通りである。

第1回（京都大学）：Language Contact and Linguistic Area among Indigenous North American Languages

第2回（東京大学）：On Identifying Old Contact-Induced Changes in Slavic Languages

第3回（北海道大学）：Doing Fieldwork on Endangered Dialects and Languages: The Former Yugoslavia and Montana

いずれの講演会にも比較的多くの研究者が集まり、質疑応答も実に充実したものとなった。また第3回は言語学者だけではなく、歴史学者、文化人類学者、アイヌ研究者、文学者など様々な専門の方々も参加し、トマソン氏に鋭い質問やコメントを出された。トマソン氏も大変満足しておられたようである。今回の講演会の受け入れおよび共同組織にご協力くださった家入葉子氏（京都大学）および越野剛氏（東京大学）にこの場をお借りして特にお礼を申し上げたい。また、本学の佐藤知己氏（大学院文学研究院）、丹菊逸治氏（アイヌ・先住民研究センター）には、トマソン氏にアイヌ語の現状について多くの情報をご教示いただいた。これにも深くお礼申し上げる。

筆者は4月16日から25日までの全日程をトマソン氏に帯同した。トマソン氏の来日は2回目であるが、ほとんど日本のことは知らないとおっしゃっていたこともあり、滞在中にストレスも抱えられるのではないかと、私は漠然とした不安があった。しかし、トマソン氏は概ねリラックスして滞在を楽しまれたようである。私も10日近くほぼ会話が尽きることなく、言語学の専門的な内容に関して、お互いの興味に関する意見交換、共通に知る言語学者のことなどで、文字通りあっという間に時間が過ぎていった。トマソン氏は明らかにご自身が話すのが好きという性格もあるが、人の話を聞くのも大変好きであり、大家であってもご自身への批判にもきちんと耳を傾けられる。今後の研究に関する助言も下さり、大変貴重な経験であった。

なお、トマソン氏は絵を描くのが大変お好きであり、氏の個人のサイトには素人とは思えない力作が並んでいる。これは「もともとは、学生だったころ、退屈な授業の時に絵を描いていたのだけれども、描いているうちに本格的に好きになった」からだと言っておられた。今回の来日で絵を描ける場所があるかと考えを巡らせていたが、ご自身の講演の時には色鉛筆を持参されないとのことだったので、これは杞憂に終わった。ただ、「あなたと会った記念に」とご著書にボールペンで絵を描いてくださった。なお、トマソン氏はさまざまな鳥に興味を持たれ、盛んに写真を撮っておられた。日本の鳥をモチーフにした絵がサイトに投稿されるかもしれない。

トマソン氏が描いたドードー鳥

学界短信

第14回ゴーゴリ研究会（ポルタワ）に参加

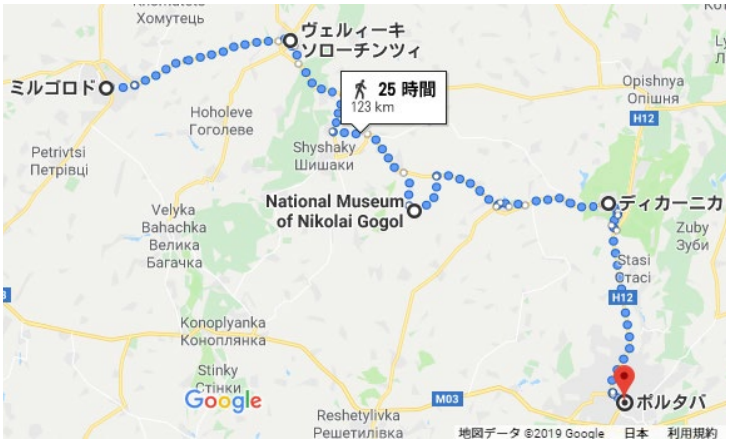
安達大輔（センター）

19世紀前半のロシアで活躍し、その後の近代文学の行方に決定的な影響を与えた作家ゴーゴリのほぼ故郷、ウクライナのポルタワでゴーゴリについての研究集会が開催され、筆者はそれに参加してきた。ほぼ、というのは厳密に言えば現在のポルタワ市そのものは作家が幼少期に教育を受けた場所にすぎない（1818年から19年にかけて郡学校で、20年から翌年には当地の教師のもとに住み込みで教育を受けた）。生まれたのはポルタワから直線で65キロほど離れたヴェリーキエ・ソローチンツィで、両者のほぼ中間に位置する父の領地ワシーリエフカ（現在のゴーゴレワ）で幼少期を過ごした。物語『ソローチンツィの定期市』の舞台はもちろんこのあたりにある（定期市も現在は年一回8月の最終週に開催されている）。さらにこの作品を含む第一文集『ディカーニカ近郷夜話』の名の由来となったディカーニカもポルタワから25キロ強、ヴェリーキエ・ソローチンツイから45キロ強のところにある。両者がゴーゴレワを通って三角形の底辺をつくるとすれば、その頂点にあたる部分にディカーニカは位置している。続編として書かれた第二文集にその名を冠するミルゴロドは、この中ではヴェリーキエ・ソローチンツィに一番近く約25キロ、ポルタワからは最も遠い場所にあるが、それでも約80キロである。

ポルタワ周辺とはかように作家の特に早い時期の生涯と創作について濃厚な記憶を堆積させているはずであって、筆者は2012年8月に一度当地を訪れ、上にあげた土地を興味深く巡ったことがある。今回は、ポルタワで国際的なゴーゴリ研究会が開催され、それがすでに14回を数えるというので、どのような研究が行われているのかに関心があった。開催時期は4月1日から3日、ゴーゴリの誕生日が旧暦3月20日、新暦だと4月1日なので、どうしてもこうした日程にならざるを得ない。このあたりの事情はモスクワの「ゴーゴリの家」博物館にて開催されるゴーゴリ研究会でも同じであるが、いずれにせよ日本の大学に所属しているとやや出張しにくい日取りではある（今回も関係の皆様にはご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします）。2012年との比較について書き出すと際限がないが、やはりモスクワからキエフへの直行便が廃止されたことは大きな出来事と感じる。とはいえトランジットヴィザは必要なく、経由地ミンスクでの乗り継ぎもいたってスムーズで、ベラヴィア航空の機内は慎ましくも快適であった。

研究会初日はゴーゴレワにある国立ゴーゴリ博物館で行われた。午前中は博物館の敷地内に新しく設立された文化センターの開会式に出席し、筆者にもスピーチの依頼があり、突然のことで驚いたが、何とか無事に務めることができた（と思っている）。その後ゴーゴリ作品に題材をとった演劇を鑑賞したが、このセンターは今後このような文化的行事に使われる予定とのことで、ゴーゴリが生活に密着している状況に驚く。午後は博物館の本館に移動、ゴーゴリ像の前で献花と写真撮影を行った後、招待者の講演に移った。筆者もそこで「ゴーゴリとメロドラマ」についてロシア語で報告を行い、メ

ポルタワ国立教育大学の教室「桜」。
中央がニコレンコ教授



ロドラマの定義やショックという概念について生産的な議論を交わすことができた。

二日目はポルタワ国立教育大学の教室「桜」に場所を移し、当地と東京をインターネットでつないだWeb会議と、一般の報告者による報告が行われた。Web会議では日本から上智大学の村田真一教授と埼玉大学の野中進教授が報告を行い、その丁寧な分析と高いロシア語力は参加者から熱い評価を受けていた。今回の主催者であるニコレンコ教授を野中教授がICCEES幕張大会に招へいしたり、村田教授がポルタワ教育大の名誉教授を務められるなど、お二人とは以前から交流があるそうだ。ウクライナのサマータイム移行を考慮していなかったために日本側の報告者の登場が遅れてしまうというハプニングが生じたが、ニコレンコ教授のとっさの判断で順番を入れ替え事なきを得た。その他の点で大きな混乱はなく、Web会議の有効性を体感することもできた。ニコレンコ教授の報告はゴーゴリ作品をウクライナ文化の文脈でとらえるものだった。

全体的な報告の内容について一般報告者のものも含めて述べてみたい。率直に言うと、参加する前の筆者はゴーゴリのウクライナ性を過剰に強調する内容が多いのではないかと予想していた。確かにそのような報告もあったが、数はわずかで少し拍子抜けしたほどである。スウィフトとゴーゴリにおけるグロテスクの要素の比較であったり、ゴシック小説の文脈でゴーゴリ作品を解釈する試みであったり、あるいはロシアの現代思想家ポドロガに言及するものなど、なじみの深い分析手法が多かった。報告言語はウクライナ語の方が多かったが、ロシア語でも全く問題なく進行していた。報告者はポルタワなどの地元を中心として、キエフやハリコフなど近隣の大都市から数名ゲストが呼ばれていた。ポルタワ教育大は名前の通り教育系の大学であり、ゴーゴリ作品を題材にした教育上の実践や工夫、成果についての報告も多かった。今回の研究会を開催した世界文学科や英語・世界文学学習法研究教育センターでは、世界文学は何よりもまず教材であり、ゴーゴリもその一つである。ゴーゴリの作家活動がすべてロシア語で行われたことが事実として受け止められ踏まえられた上で、ゴーゴリはわが町出身の世界文学作家として扱われている――これが雑駁であるが、全体的な印象である。夜は市内のゴーゴリ劇場でオペレッタ鑑賞に誘っていただいた。司会はもちろんゴーゴリ（に扮装した俳優）である。演し物は新旧の歌謡ショーといった趣で楽しめた。建物も立派で、ロシアの伝統的な劇場を思わせるものだった。

ゴーゴリに扮した俳優

三日目は日本についての講演を依頼されており、「日本におけるSNS」「日本における若者文化」についてロシア語でお話をさせていただいた。会場はやはり「桜」だったのだが、教室のこ

の名前が示すように、ニコレンコ教授はじめスタッフや学生たちの日本文化への関心は高い。学生たちの笑い声が大きすぎてニコレンコ教授に叱られるなど、微笑ましい盛り上がりを見せてくれた。カリキュラムに日本語の授業はないというが、独学で日本語の知識を身につけている学生もいた。スタッフ・学生たちとの記念撮影を和やかに終えた後、突然学長室に呼ばれるという出来事があった。ステパネンコ学長が今後の交流について話したいという。実は前日にニコレンコ教授とお話しした際に、日本の研究者との交流実績について説明を受けながら、日本でスラブ文化を研究する最も高度な機関の一つであるスラブ・ユーラシア研究センターと交流協定を結びたいという希望についてお聞きしていた。センターとしてもこれまでウクライナの大学との協定はないので、ウクライナの歴史的重要性や昨今の世界情勢に占める大きさを考えると、ありがたい提案と筆者にはその時思われた。その翌日にすでに学長に話を通しているとは、ニコレンコ教授の行動力と組織力を改めて痛感することになった。会談ではステパネンコ学長からも全面的なサポートをいただけるとのことで、将来の研究・教育交流へ明るい展望を持つことができた。その後ウクライナ料理でおいしく昼食をいただいた後、市内周辺のゴーゴリに関係する名所をニコレンコ教授とカプスチャン准教授に案内していただいた。

今回の研究会は、ゴーゴリのほぼ故郷で開かれている研究会に参加するという貴重な経験に加え、ウクライナの地方都市でのゴーゴリの研究と教育・受容のありかたを窺い知ることができた点で、たいへん有意義であった。そして何よりSRCとウクライナの大学の研究・教育交流の礎を築くことができたことをうれしく思っている（その後2019年7月にポルタワ教育大英語・世界文学学習法研究教育センターとSRCの間で部局間協定が締結された）。研究・教育への真摯で前向きな姿勢が印象的なニコレンコ教授をはじめ、いろいろなことに配慮しあたたかい雰囲気をつくってくださったステパネンコ学長以下同大学のスタッフ、知的好奇心にあふれた学生たち、そして道中筆者を和ませてくれた猫たちに深く感謝したい。

M.E.S.S. 2019 “Religions in Mongol Eurasia” 参加記

諫早庸一（センター）

2019年5月15日、ウィーン大学にて国際会議M.E.S.S. 2019が開催され、そこで報告を行った。M.E.S.S.とは、Mongol Empire Spring Seriesの略であり、2011年から2015年にかけてMichal Biran（The Hebrew University of Jerusalem）をPIとしてヘブライ大学で展開したプロジェクト「モンゴル期ユーラシアにおける移動・帝国・文化交流」に関わった若手研究者たちが、毎年春にモンゴル帝国についての特定のテーマの下、持ち回りで行っている国際ワークショップのことである。発足時からのコア・メンバーは、Francesca Fiaschetti (University of Vienna), Konstantin Golev (Institute for Historical Studies of the Bulgarian Academy of Sciences), Márton Vér (Berlin-Brandenburg Academy of Sciences and Humanities), Marie Favereau (Oxford University), 邱軼皓（復旦大学）そして、私、諫早となっている。第1回はイスラエル・イェルサレムにおいて「外交」をテーマに、第2回はブルガリア・ソフィアにおいて「戦争」をテーマに、第3回はハンガリー・セゲドにて「シルク・ロード」をテーマに行われたワークショップ・シリーズは今年、ウィーン大学のFiaschettiのオーガナイズの下、オーストリア・ウィーンにて「宗教」をテーマに開催された。今回は初日のM.E.S.S. 2019 “Religions in Mongol Eurasia” の後に、オーストリア科学アカデミーとイラン学研究所の共同でもう1つの国際会議

“The Mongols and Religions” が2日間にわたって行われ、計3日間にわたる大規模なものとなった。M.E.S.S.では合計4セッション11人、その後の国際会議は6セッションで14名が登壇した。さらに初日の夜には、モンゴル帝国に派遣されたキリスト教使節団について多くの研究を為し、近年*The Mongols and the Islamic World*（New Haven: Yale University Press, 2017）を上梓したモンゴル帝国期における宗教研究の第一人者Peter Jackson (Keele University)が “The Mongols and Religions: Precocious Tolerance or Cynical Manipulation” と題した基調講演を行った。

私は初日の第1セッション “Religious Economy” に組み入れられ、ヘブライ大学時代の同僚であったOr Amirと、去年日本学術振興会特別研究員として籍を置いた立教大学文学部の四日市康博を副査として現在National University of Mongoliaで博士論文を執筆中のEnerelt Enkhboldと報告を行った。

最初はEnkhboldによる “Mongol Tax Policy on Religions: A Macroeconomic Perspective” と題した報告。アメリカ中央ユーラシア学会で新人賞を受賞した俊英である彼は経済史家であり、アジア開発銀行に勤める現役のエコノミストでもある。今回のテーマも、モンゴル帝国における免税政策を数量分析でもって扱うものであった。モンゴル帝国は仏教徒・キリスト教徒・道教徒・イスラム教徒に対して免税政策を取ったが、本報告ではその具体相が分析された。それぞれの宗教について、人頭税はモンゴル帝国を構成する4ハン国それぞれにおいて免除されていたのに対し、商税は元朝のみ免除されていたことなど、土地税・駅伝税を含めて、ハン国ごとに減免の範囲には差異があった。個人的には、『元史』のデータ分析から導き出された、元朝の国家収入の実に8割が塩税からのものであったという結果に驚かされた。当時のインフレ率が数式から算定されるなど、経済史家らしい議論に感銘を受けたが、同時にそこに記される数字を鵜呑みにできるのか、「史料の性質」を考えずにはいられなかった部分もある。

ウィーン国立歌劇場

続いてはAmirによる報告 “Divination as Cultural Capital across Mongol Eurasia: A Mamluk Perspective” である。彼はモンゴル帝国（1206～1368年）ではなく、その西端と国境を接し、エジプト・シリアを統治していたマムルーク朝（1250～1517年）を専門としている。今回の発表で彼が扱ったのは、イスラム教の「神秘主義」とも表現されるスーフィズムの導師/シャイフとマムルーク朝スルタンとの関係であった。シャイフ・ヒズルとスルタン・バイバルス（治世1260～1277年）など、モンゴル帝国期ユーラシアにおいては、スーフィー・シャイフが王に近侍し、絶対的な権力を振るうケースが多々ある。そして、その描写には一定の「トポス（定型表現）」が存在する。そのトポスの例を主に「占い（divination）」の観点から見ていくのが彼の報告であった。こうした語りは “cultural capital” として積み重なり、結果として似たような構成の語りを同時代のユーラシア各地に生み出していく。質疑においては、こうしたトポスがどれだけ実情を反映しているのか。トポスという定点から社会をどのように見ればよいのか、こうしたところに議論が及んだ。

私の報告 “From Alamūt to Marāgha: Religious Polarization and Scientific Commonalization” は第1セッションの最後にあった。博士論文で扱った、この時代にイランで活躍した博学者ナスィール・アッディーン・トゥースィー（1201～1274年）が報告の中心である。今回の報告は彼が、

エウクレイデス『原論』やプトレマイオス『アルマゲスト』のような数学書・天文書を同時代の学者の理解に供すべく書き直した「再述（*taḥrīr*）」プロジェクトの中身を追うことで、彼の人生の２大学術拠点であったアラムート城とマラーガ天文台との性質の違いを浮かび上がらせることを目的としていた。トゥースィーはアラムート期にはニザール派（イスマーイール派）、マラーガ期にはイマーム派（シーア派）と、宗派を変えるものの、数学・天文学への強い関心は終生変わらず、この学問の精通が両時代を通じて彼の昇進の鍵ともなった。一方で、彼が真に天文学的に革新的な仕事をしたのはアラムート期の方で、学術センターとして有名なマラーガ天文台はむしろ、その成果を広めるネットワークの軸だったところ意義があると論じた。幸いにして質問をそれなりの数、頂戴することができた。哲学・数学のような「必ずしもイスラム教的でない」学問の主であるトゥースィーを「ムスリム博学者」として描写するのはどうなのか。アラムート期にはこの場所以外にも天文学の分野で革新的な仕事が生まれているが、この時代に立て続けにそうした業績が出たことに理由はあるのか。再述テクストの分析にはどの種の写本を用いたのか。実はマラーガ期の最初にはすでにケルマーンにおいてトゥースィーの作品が写されている。このことをマラーガの学術ネットワークから読み解くことができるか、などなど内容を理解されていなければ出ようのない質問に加えて貴重な情報提供もいただき有意な議論ができた。

2日目のセッションが終わった後には、オーストリア国立図書館へ連れ立って行き、帝国領のうちイラン・イラクを統治したイル・ハン朝の初代君主フレグ（治世1256頃～1265年）が1262年にフランス王ルイ９世（治世1226～1270年）に宛てた書簡の、残存する唯一のラテン語コピーを見学した。館内ではこの「本物」を前に、この書簡についてPeter Jacksonが解説をするという僥倖に巡り合うことができた。彼が美しい英語で語った以下の言葉が大変印象に残っている。

> この書簡はモンゴルが別のモンゴルと戦うために外の勢力と連携を図った、年代が分かるもののなかでは最初の書簡だ。その意味では、この書簡はモンゴルの自力での世界統治の夢の終わりを告げるものとも言える。だけれどもどうだろう、この書簡の冒頭句は依然として天命を受けたモンゴルの世界統治を謳っているんだよ。この書簡は理想と現実の狭間にある、興味深い代物と言えるね。

会議の次の日の土曜日にはオーストリア科学アカデミーのJohannes Preiser-KapellerとEkaterini Mitsiouとが組織したエクスカーションに参加した。エクスカーションの目的地は、ウィーンの北にあるカーレンベルクの丘であった。そこでPreiser-Kapellerが1683年のオスマン帝国軍による第二次ウィーン包囲について――自作の素晴らしい地図でもって！――解説をしてくれた。この丘はこの包囲戦の戦略上の要地であったのである。ここから坂を下ったポーランド軍は、オスマン帝国の主軍に決定的な一撃を加える。これがオスマン帝国軍の敗北を決定付けるものとなった。この戦いは一般にはオスマン帝国とヨーロッパとのパワー・バランスの転換点だとされている。これ以後オスマン帝国の衰退が顕著となる一方で、ヨーロッパは唯一の巨大勢力となっていく。このエクスカーションの前の私の世界史認識は、この包囲戦においてヨーロッパの近代兵器がオスマン帝国軍を問題としなかった、というものであった。しかし、実際のところ戦局は一進一退で、オスマン帝国軍がその高い鉱山技術を生かして掘り進めていたトンネルはウィーン内部へと抜ける寸前だ

カーレンベルクの丘からウィーン市街を望む

った。この戦いはどちらに転んでもおかしくなかったのである。オスマン帝国軍の指揮官であったカラ・ムスタファがもしポーランド軍の到来以前にこの丘の占領を決断していたら、結果は逆になっていたかもしれない。ウィーン側の勝利は実のところ、多くの偶発的な要因に拠っていたのだ。このエクスカーションは実に多くを学ぶ機会となった。Preiser-KapellerとMitsiouとにあらためて感謝を捧げたい。このM.E.S.S.を札幌で開催することが目下の私の野望である。

◆　学会カレンダー　◆

2019 年	9 月 28-29 日	ロシア史研究会2019年度大会　於大東文化大学板橋キャンパス https://www.roshiashi.com/annual-conference
	10 月 10-13 日	20th Annual CESS (Central Eurasian Studies Society) Conference 於ジョージ・ワシントン大学　https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/
	10 月 18-20 日	日本国際政治学会2019年度研究大会 於朱鷺メッセ　http://jair.or.jp
	10 月 26-27 日	日本ロシア文学会2019年度全国大会　於早稲田大学 http://yaar.jpn.org/2019年度-第69回全国大会/
	11 月 2 日	地域研究コンソーシアム2019年度一般公開シンポジウム・年次集会　於国立民族学博物館　http://www.jcas.jp/about/nenji.html
	11 月 9 日	内陸アジア史学会2019年度大会　於東北大学 http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/
	11 月 9-10 日	ロシア・東欧学会2019年度研究大会 於慶應大学三田キャンパス　http://www.jarees.jp
	11 月 23-26 日	51st Annual ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention　於サンフランシスコ https://www.aseees.org/convention
	12 月 12-13 日	スラブ・ユーラシア研究センター 2019年度冬期国際シンポジウム
2020 年	4 月 1-4 日	The ABS (The Association for Borderlands Studies) 2020 Annual Conference 於ポートランド　https://absborderlands.org/meetings/annual-meetings/
	8 月 4-9 日	ICCEES第10回大会　於モントリオール　http://iccees.org/

大学院だより

◆　大学院の改組と院生の入学・修了状況　◆

2018年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、2名が修士課程を修了しました。また、大武由紀子さんが「アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス：生産主義理論とその具象」という論文で課程博士号を取得しました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。

2019年4月から、大学院文学研究科の改組に伴い、スラブ社会文化論専修は、北海道大学大学院文学院人文学専攻スラブ・ユーラシア学講座スラブ・ユーラシア学研究室となり、修士課程6名と博士課程2名の入学がありました。今年度の大学院生は以下の皆さんです。［長縄］

2019年度スラブ・ユーラシア学研究室大学院生名簿

学年	氏名	研究テーマ	指導教員	副指導教員	
D3	小野 瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄	仙石
	生熊 源一	戦後ロシア美術	安達	野町	ウルフ
	アリベイ・マムマドフ	北方領土問題とナゴルノ・カラバフ紛争の比較	岩下	田畑	宇山
	寺岡 郁夫	ウクライナの構成地域とその形成過程	岩下	宇山	田畑
	林 健太	ピョートル１世時代の官僚出版業と国家出版言語	長縄	野町	安達
	ミルラン・ベクトゥルスノフ	ソヴィエト・キルギスの形成：中央政権と現地人エリートの関係を中心に	宇山	長縄	ウルフ
D2	中尻 恒光	ロシアにおけるマクロ経済政策（ポリシー・ミックス）に関する研究	田畑	仙石	岩下
D1	ヴィクトリア・アントネンコ	19世紀と20世紀におけるサハリンと日本との経済関係	ウルフ	田畑	長縄
	上村 正之	1800-30年代ロシア文学におけるコサック表象の変遷	安達	宇山	野町
M2	唐牛 健成	ロシア極東における対日歴史観の変遷に関する研究	岩下	ウルフ	
	松元 晶	映画にみるウズベキスタン	宇山	安達	
M1	王 雨寒	歴史と変遷：ウイグル人の中央アジアへの移住及び文化の適応	宇山	長縄	
	王 釗	ロシア経済産業	田畑	仙石	
	小太刀 雄海	19世紀末フェルガナ盆地の綿花栽培とその政治的背景	宇山	長縄	
	蔣 政倫	2015年以降ロシア極東における経済特区について	田畑	仙石	
	中尾 伶	「北方領土問題」の総合的研究	岩下	田畑	
	費 宇澄	ゴルバチョフの経済改革と鄧小平の経済改革の比較について	田畑	仙石	

地図の勉強会を振り返って

寺岡郁夫（博士後期課程）

2017-2018年度にRA（リサーチ・アシスタント）を担当することになった私は何か研究に関する企画をしようと思い、自主ゼミをすることを考えた。そのテーマは地図である。地図とは地上にある事物を記号化して描いているもので特定の場所についてどこに何があるかを詳細に示したものであるが、地理学ではこれが資料として使われることが多い。このテーマにした企画意図としては、前に私の所属していた地理学の研究室での研究手法をスラブ・ユーラシア研究センターの人に伝えたかったということがある。

その研究手法とは、地図と資料を重ね合わせ、オリジナルの地図（主題図）をつくるということである。それは空間的にその地域を理解するために有効な手段の一つである。地域研究をしているスラブ・ユーラシア研究センターだからこそ、地図はどこの対象地域を扱うにしても利用できるものであり、その視点を紹介しようと勉強会を企画実施することにした。企画当初は地図という自分の関心を押し付けているだけではないかと少し利己的とも思った。しかし、参加

者の方が話を聞いてくださり、議論していくにつれてこういうテーマも的外れではなく、企画した甲斐があったと思った。

勉強会の日時は10月から翌年1月の月1回に金曜日の午後、1時間という設定で自主ゼミの形式でされた。参加制限も事前の申し込みの必要もない気楽な雰囲気にしようと努めた。なお、金曜日にしたのは総合演習で午前中に院生が多く来ることを予想し、また使用する教室が借りやすい時間帯だったからである。参加人数は概して4人前後のことが多かった。

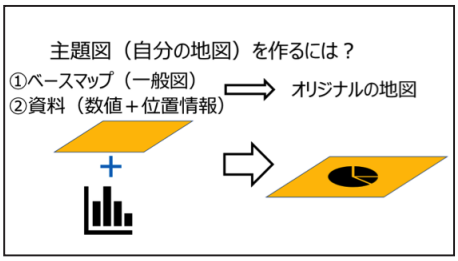


図1 研究手法について説明した勉強会での資料

この自主ゼミを実施していくにあたって、地図を活用するという研究関心が近かった植田暁さん（2017-2018年度にスラブ・ユーラシア研究センターに日本学術振興会特別研究員として滞在）のご協力がなければ、ここまで継続できなかったと思う。改めてこの場で感謝申し上げます。

結果的にこの自主ゼミは2年続いた。年度ごとに内容が違っていたので以下に説明したい。1年目の2017年度は地図作成の手法についての解説をして、この研究手法を理解するということを目標とした。地理学における地図の考え方やコンピュータによる地図描画の方法などについて話した。コンピュータ上での地図描画には大きく2つの方法があり、一つはベースマップ(基図)を用意してそこからドロー系ソフトで点や線や図形を描いていく方法、もう一つはGIS（地理情報システム）のソフトを活用して統計などの数値情報から地図を作成していく方法である。私が前者の方法、植田さんが後者の方法にそれぞれ詳しかったので、解説役となり参加者の方に説明をした。

勉強会では、コンピュータのフリーソフトを使用して地図を作成する作業について、プロジェクター上で手を動かしながら説明した。地図描画の方法についてさらにもう少し詳細に書くと、私がInkscapeを用いて点や線や図をパソコンで描く作業を、一方植田さんがQGISを用いて、数値情報の計量による地図作成作業を担当した。ともに使用したのはインターネットからダウンロードできるフリーソフトであるが、これを題材として使ったのは手軽さを重視したためである。さらに今回の勉強会では詳しく紹介しなかったが、有料ソフトであるAdobe IllustratorではInkscapeのように点や線を描く作業ができること、一方同じく有料ソフトであるArc GISではQGISのように計量地図の作成ができることも話した。

2年目の2018年度はオリジナルの地図を作成して研究に関する具体的な内容を発表していくということを目標にした。作成した地図をもとに議論していくのは、普段のゼミや授業にはない独特の雰囲気だった。発表内容としては「1930年代カザフスタンの人口動態」、「ウクライナのGDPや人口の比較」、「ソヴィエト・中央アジアの領域決定」、「カザフスタンのドゥンガン人コミュニティの地理的分布」であった。どの発表においても興味深い地図が提示されていた。

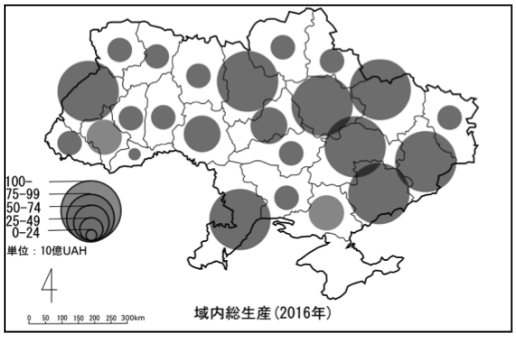


図2 ウクライナの域内総生産の比較

当初は自主ゼミと名付けていたが、いつの間にか「勉強会」と呼ばれるようになった。その名の通り、参加者みんなで地図について勉強できたと思う。勉強会以外のときにも地図について議論することもあり、この勉強会

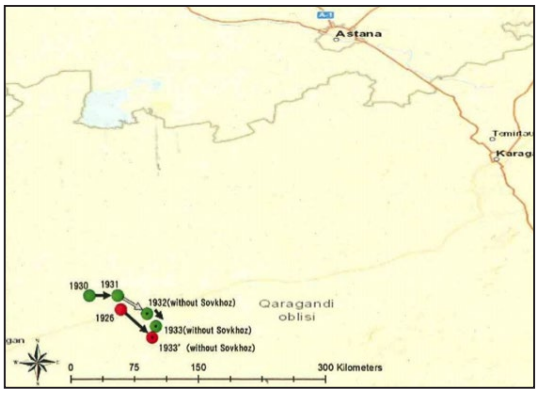


図3 カザフスタンの1930年代初頭の人口重心の試算

が新たな研究の関心を引き起こしたのではないかとも思った。

この勉強会を振り返って反省すべき点として主に3つを挙げる。一つ目は宣伝のやり方である。日時と内容についての告知をメールでセンター関係者の方に伝えていたのだが、メール1回だけでは認知度が低く周知が十分でなかった。ビラを掲示するといった他の方法を考えるべきだった。

二つ目は勉強会の拡張を図れなかったことである。告知の方法が前述の通りである以上、参加してくださったのはセンター内部の方だけであり、参加人数を増やすという点においても、さらにセンター外部の人に向けて積極的に宣伝することをしてもよかったのではないかと考える。例えば、北大内には地理学の研究室（文学院地域科学講座）があり、そこでGISを活用して研究されている大学院生の方がいたので、特別授業をお願いすることも考えられた。

三つ目は参加者の研究対象地域がそれぞれ違うこともあり、共通の地図を通して検討することができなかったことである。とくにベースマップとなるような地形図について、スラブ・ユーラシア地域を描いたものを参加者で共有できればと思っていたが、そうすることはできなかった。また地図出版事情やインターネットで日々アップロードされる地図についての話もすればよかったと思われる。また可能性の一つとして考えられた、実際に紙の地図でペンや色鉛筆を用いて格闘する「伝統的な」地理学のゼミのような勉強会もすることはなかった。

以上、いくつか課題を並べてきたが、この勉強会の意義としては、地図は地域研究にとって重要な資料の一つであるということを共通理解できたことである。学際研究には幅広い専門分野があるが、地面の上で起こっている事象を対象としている以上、地図は何らかの形で関わってきており、研究の視野を広げる可能性をもっている。

参加者の皆さんのおかげでこの勉強会が発展継続できた。勉強会の核として度々の相談に応じてくださった植田さん以外にも、毎回のように参加してくださったミルラン・ベクトゥルスノフさん、アセリ・ビタバロヴァさん、田畑朋子さんに感謝申し上げたい。また勉強会を始めるにあたってアドバイスをいただいた宇山智彦先生にも感謝申し上げたい。

最後に、この勉強会の企画者としては研究発表等で対象地域についての説明がある際に、方位と縮尺が記載された地図があることを願っている。

大学院修了者の声

“スラ研”と私

大武由紀子（2018年度博士号取得／北海道大学文学院専門研究員）

昨年(2018年)3月31日、デッドラインぎりぎりに博士論文を提出した。横浜市立高校社会科(世界史）教諭の社会人として修士課程に入学したのが2002年、2年後に修士論文を出して元の職場に戻った。大小様々な事件の多い、しかし楽しい生徒たちとの日々に終止符を打つことになった定年退職を機に博士課程に再入学した（2013年4月)。その時点で博士課程に残されていたのは4年の在籍期間（退学後1年以内の論文提出を加えて5年）だった。当時、自分自身でさえ博士論文提出の可能性を疑問視していた。「若い方たちでさえ長い年月をかけてやっとの思いで提出する博士論文を、ロシア留学さえもまだ果たしていない私にできるのだろうか・・多分・・否」。そのような逡巡を押して再びスラ研のドアを叩いたのは何だったのか。

今、窓の外に武蔵の国と相模の国の境[1]（現在では横浜市と藤沢市の境）を流れる境川沿いの満開の桜並木を眺めながら、「修了者の声」の原稿を前にここまでの時間の長さに途方に暮れている。気が付けば修士入学から博士修了まで、その間本来の教師の仕事に復職した期間を入れて（この間、本業と研究という非生産的でどう考えても不可能な二足の草鞋を履いて細々研究を続け、年休の取れる範囲で総合演習に参加し報告した）15年に及ぶ年月になった。

3人の子供の一番下が大学に入学した2002年春、丁度前年に文科省によって創設された「大学院修学休業制度」というそのものずばりの名称の、しかしそれを利用する側にとっては経済的にこの上なく過酷な制度を利用して[2]、そして夫と子供たちに（一応）承諾を得て、相模の国から蝦夷地札幌に移り住んだ（札幌は私にとって19才まで住んだ故郷でもあり、この意味でスラ研は私を札幌に30年ぶりに引き戻してくれた恩人でもある)。

自分の内外に様ざまなバイアスを日々抱え、感じていた教師の生活から、一気に学術の場で

1　この原稿を宇山智彦先生に提出した所、折り返しに「境川が武蔵国と相模国の境だったのは町田などの上流部で、藤沢市にさしかかるあたりは、対岸の横浜市泉区を含め両側とも相模国だったように思うのですが・・・」とのメールを頂いた。はっと思い調べたところ先生の御指摘の通り、我が家の対岸もかつて相模国でした。泉区はかつて10年間居住した土地であり、「相模国鎌倉郡」と明記された石柱の立つお寺をよく散歩したことを思い出し、先生の慧眼に首を垂れると共に、自らの身を大いに恥じ入りました。

2　「大学院修学休業制度」は、文科省により2001年に設立されたノーワーク・ノーペイの原則に基づく制度。給与は諸手当も含み全額支給なし、共済等の掛け金は休業全期間を制度利用者自身が月々支払う（大武の場合月約2.5万)。修学に関わる授業料等の経費全ては制度利用者の負担であり、それに加えて前年度の収入額に起因する様々な問題――奨学金及びそれに類する公的援助（大学の寮の利用、授業料の部分的免除等）の適用外など――が派生する。加えて2年間の休業は就業年数に数え入れられ退職金の2年分の減額につながる。修学に関しては、研究テーマに関する縛りはないが、高校教師のより高位な免許である専修免許状の取得が条件とされることから、通常の修士課程の必要取得単位数より18単位上乗せが課せられる。加えて専修免許取得はその後の給与に反映されない（経験者としてこの18単位上乗せは、自分自身のテーマに基づく研究にとって非常に重い足枷になった)。文科省のHPによると、本制度の設置当初（2002年）の高校教師の利用者は150人、翌年に162人のピークを迎え、その後は下降の一途をたどり2016年（平成28年）には80人とほぼ半減している。その中で男女の占める割合は男性29、女性51人であり、家族扶養の責をより多く担う男性教師にとってより経済的に困難な事実を示す（横浜市立高校職員における本制度の2002年～2016年の利用者総数8名のうち男性0人、女性8人であった)。私は失礼を顧みずこの場を借りて、現役教師の再学習の数少ない場の一つである本制度に対して、完全な経済的自己責任で自己研鑽を目指すという点から専修免許状取得の枠を外すことを（後に続く方々のためにも）当該の方々に強く望むものである。

あるスラ研に身を移し、そこで過ごした修士課程の2年間が、紆余曲折の長きにわたって研究を諦めずに博士論文提出まで私を牽引してくれた1つの要因だったと思う。それはスラ研に大学院が設立された2年目に当たり、学術を真摯に追求するという点で全くバイアスのかからない（と私には思えた）場であり、今も敬愛の念を覚える教授陣の瞠目する授業内容だった。

職場でのちょっとしたバイアス――1930年代のナチス・ドイツとソヴィエト・ロシアに関する私の授業に対する同僚からの批判――が私に大学院で再び勉強することを促す一つの要因であり、このバイアスを解決するために（学術という点で）バイアスレスのスラ研――つまり学生の出自も年齢も、勿論男女の差も全く度外視し、ただ研究の内容とその成果（端的には金曜日2限目の総合特別演習の発表）のみが激しくかつ厳しく問われる全き学術の場――に来たことになる。さらに職場での同僚からの批判が私の15年に及ぶ研究テーマ、つまり1920年代～30年代ソヴィエトのアヴァンギャルド芸術家にしてスターリン翼賛ポスターの第一人者であるラトヴィア人画家グスタフ・クルーツィスの研究に繋がっている。

修士の2年間を、年若い学友たち（「学友」とは修士仲間のA氏の言葉であるが）と連帯感さえ感じながらスラ研の激しく厳しい授業（泣きそうだった）と学術レヴェルに共に立ち向かう「（疑似）青春の日々」とすれば、博士課程は、孤独にさいなまれつつ机に向かう「絶望の日々」だった。

博士課程に再入学した2014年4月、研究仲間の若い友人にそれを報告すると、折り返しに彼女から「つらいだけの博士課程」に入学したことに応援のメッセージが届けられた。「つらいだけ？」と思ったその言葉は見事に的中した。そこにはスクラムを組む学友は見当たらなかったし、博士課程として当然のことに常に一人ぼっちだった。ロシア語資料を前に終日必死で読んで1頁どころか数行しか進まない日々、いたたまれずに雪の降る夜に家の近隣を歩きまわることも多々あった。2・3日集中して机に向かっていると孤独感にさいなまれ、淋しさのあまり家に電話すると電話口に出た娘に「好きで出て行ったのでしょう」と優しく諭され、あっそうかとまた机に向かった。孤独感とともに画家クルーツィスの持つ多声性に惹きつけられていった。

4年の博士課程在籍中、10ヶ月をモスクワ大学歴史学部20世紀美術史学科で勉強できたことは「つらいだけの博士課程」の中の数少ない心温まる灯の1つである。私の年齢が問題視されヴィザ発行が遅滞し、そのため1か月半遅れて10月中旬にモスクワのシェレメチエヴォに夕刻遅くに到着した私を迎えてくれたのはスラ研に研究員として滞在していたH氏だった。どういう訳か彼女はタクシーを使わずエクスプレスを用い、その終着駅のベラルースカヤでメトロに乗り替えた。モスクワ大学の寮があるウニヴェルシテート駅までいくつもの階段を、特大の重いトランクをまるで自分の荷物かのようにぐいぐいと引っ張り上げながらメトロを乗り継いでやっと目的の駅に降り立った。そして雪の降る寒い夜道をガタガタと大きく揺れるトランクを無言で引きずりながら警備員の立つゲートを潜り抜けて暗く古びた本部の寮にたどり着いた。H氏の剛力の助けで幕が落とされたモスクワ大での日々に、今でもやり取りが続く研究に繋がるロシアの同性の友人たちを得ることができた――これもスラ研への感謝に繋がる。

国立ラトヴィア美術館前で
クルーツィス・コレクション担当
キュレーターのマリタと

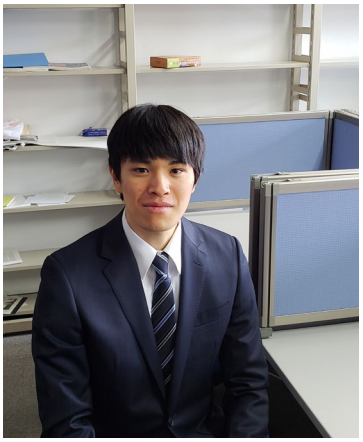
2015年7月、帰国してすぐに全く予期しないことに上の娘が突発性難聴を発症し、7カ月間研究を途絶させ、札幌からも撤退して家族と共に過ごした。聴力は次第に回復し、職場復帰も問題なくなった博士課程最後の年度の2017年４月

に研究を再開させ、さらにこの年度最後の月である3月にモスクワのトレチャコフ美術館とラトヴィア・リガの国立ラトヴィア美術館に3週間の資料収集に出かけた。こうしてデッドラインぎりぎりにすべてが終了した。

修士課程から始まり御退官までロシア語の初歩からご指導いただいた望月哲男先生、そしてその後の嫌な役回りをお引き受けいただき歴史という新たな視点から真摯な御指導をいただいた宇山智彦先生のお二人にスラ研でお世話になった全ての方々を代表して心からお礼を申しあげます。最後に末尾を借りて、生活の不便を口にもせず長い間黙々と支えてくれた夫と3人の子供たちに衷心より感謝したい。（2019年4月25日）

私の大学院生活を振り返って

谷原光昭（2018 年度修士課程修了）


院生室での筆者

私は優秀な学生ではなかった。入学当初は博士課程への進学を考えていたものの、その後自身の実力不足を痛感しそれを断念することとなった。また、修士論文を執筆する上でも大きな苦労を強いられ、結果として十分な成果を出すには至らなかった。そのため修士課程を修了した今、達成感を得ることは必ずしもできていない。それでも、スラブ・ユーラシア研究センターで過ごしたこの2年は自分自身にとって大いに意義深いものであったと感じている。それは一つに、様々な分野、地域を研究している人たちと交流を持つことができたからである。

大学院生活で特に印象に残っているのは、毎期金曜2限に開講されているスラブ社会文化論総合特別演習の時間である。これは毎回2名の院生、または助教や研究員の方々が自身の研究成果を報告し、参加者が質問やコメントをするという形式で行われているものであるが、ここでは、自身と専門が異なるため普段はあまり関わることのない人からも興味深い話を聞くことができた。

また、センターでは各種研究会や年2回の国際シンポジウムが行われ、このために国内外から多くの研究者が集まる。こうした方々とは交流を図るとまでは至らないことも多かったが、それでも直接本人の口から研究発表を聞くことによって、書物を読むよりも多くのことを学び、感じ取ることができたように思う。

思い返せば、私は自身の研究者としての資質についてあまり考えることなく、ただ何か面白いことを知りたい、面白い話が聞きたいという軽い気持ちで大学院修士課程への進学を決めてしまった（本大学院への入学のきっかけは、指導教官としてお世話になった宇山智彦先生が『現代思想』第42巻第10号（2014年）に発表されたウクライナ危機についての御論考を読んで受けた感動であった。国際情勢を独自の視点で分析するその論評に、「こんな見方があるのか」と大いに舌を巻いたことを覚えている）。その意味で、こうしていくつもの「面白い世界」を垣間見ることができたことは私自身にとって大きな収穫であったのだが、無論、研究に携わる者であれば、そういったものを単純に楽しめば良いというわけではなく自らの研究を客観的に捉え

直す機会としても活用することが求められる。今にして思えば、私はこうした経験を自分の研究に生かそうとする努力が不十分であったのかもしれない。

さて、取り留めのない話が続いたが、言いたかったことは、私はこのスラブ・ユーラシア研究センターで実に有意義な時間を過ごすことができたということである。膨大な蔵書数を誇る図書館や充実した大学院生助成制度、そして学術界の第一線で活躍する先生方の存在も含め、これほど環境に恵まれた場所は日本でもそれほど多くはないだろう。

スラブ・ユーラシア地域に関心を持ち、大学院への進学を考えておられる方々には、当センターを心からお勧めしたい。（2019年4月7日）

元指導教員より：谷原さんは謙遜していますが、彼の修士論文は、未承認国家アブハジアの問題と、北コーカサスおよびトルコにおけるチェルケス民族運動の関係という未開拓なテーマを、多くの文献と理論を使って研究した、優れた論文でした。［宇山］

図書室だより

◆ 「樺太・千島戦争体験の絵」を NHK 札幌放送局から受贈 ◆

昨年、NHK札幌放送局は戦後73年プロジェクトとして、視聴者から樺太・千島戦争体験の絵を募集し、寄せられた絵をもとに取材して証言を集め、8月に夕方のローカルニュース番組「ほっとニュース北海道」で10回にわたって放映しました。

これらの絵は、樺太・千島でのソ連との戦争、その後のソ連統治下の生活を体験した35人の視聴者が、樺太・千島各地での体験を思い出して新たに描いたもので、子供の目で見た戦争とその後の暮らし、北海道に船で渡った時のことを鮮やかに伝えてくれる貴重な資料です。北海道在住の方だけでなく、神奈川県や大阪府など、遠方から絵を寄せられた方が何人もおられます。

戦争体験を語ることができる人が少なくなるなか、番組に寄せられた絵を後世に継承できるようにしたいと、番組の企画時にNHKから相談があり、番組企画の終了後にセンターはNHKから絵を受贈し、保存・公開することにしていましたが、本年6月24日に寄贈を受けましたので、お知らせします。［兎内］

◆ 雑誌総目次データを作成・提供 ◆

図書室では、2015年度より関係雑誌の総目次テータ作成に取り組み、すでに『殖民公報』、『ソ連研究』などについてこれを作成し提供を行っています。今年に入ってからは、いまはなきナウカ社の『窓』（第1～133号、1972～2005年）、『ロシア手帖』（第1～40号、1972～1995年）、および『セーヴェル』（刊行中。第1～34号、1995～2018年分を作成）について、これを作成し、希望者に頒布の他、皓星社に提供し、同社の雑誌記事索引オンラインデータベース『ざっさくプラス』に収録されておりますので、お知らせします。［兎内］

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第66号は12本の投稿のうち、以下の力作を掲載することになりました。発行までにはもう少し時間がかかりそうです。お待たせして申し訳ございません。

〈論文〉

笹山啓　からくり人形の反乱：ペレーヴィン作品における「ヒエラルキーの崩壊」のテーマ

ミルラン・ベクトゥルスノフ　ソヴィエト・クルグズスタンの形成：クルグズ人政治エリートの民族主義の登場とその展開

北見諭　生成する世界とメシア的な主体：ベルジャーエフの世界戦争論をめぐって

斉藤毅　形象と「異(い)なるもの」：1910-20年代ロシア詩学史より（ポテブニャー、シクロフスキイ、マンデリシタームその他）

村上亮　ヨーゼフ・レートリヒのみたボスニア・ヘルツェゴヴィナ併合問題：二重制における自治をめぐって

〈研究ノート〉

稲葉光俊　新渡戸稲造のバルカン観：「慕斯尼亞の農政」の生政治的読解

新田愛　映画音楽から辿るアリフレート・シュニトケの多様式主義確立：フルジャノフスキー監督のアニメーション映画を例に

〈資料〉

半谷史郎　1965年5月9日の「黙祷」放送：ソ連における戦没者追悼行事の創造

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第67号の原稿締め切りは、2019年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。なお、次号については、ハードコピーの提出先はセンターの長縄宛に、電子ファイルはslavicstudiessrc@gmail.comにお送りください。［長縄］

◆ *Acta Slavica Iaponica* ◆

第40号は投稿がかなり多く、編集作業も大変難航しました。現在編集作業中で掲載内容は決まっていますが、諸事情により刊行が大幅に遅れております。このことをお詫び申し上げます。掲載論文は以下の通りです。

ARTICLES

Александр Александров	Литературная критика массовых периодических изданий. Роль и место в литературном процессе 1880-х —1900-х гг.
Константин Богданов	История советской филателии: не/контролируемые сообщества
Paul du Quenoy	Showered with Privileges by Our Government: Russian Self-

	Presentation to Muslim Communities in Ottoman Syria
Bruce Grant	The Donkey Wars: Satire and the Political Imagination in the Caucasus
Anton Ikhsanov	A Critique of Alexander Samoilovich (1880–1938) and the Process of an “Imperial Visitor’s” Evolution
Jarosław Jańczak	Construction and Deconstruction of the Borders of (Re)Integration Projects in Eurasia: The Western and Eastern “Edges” of Russia
Azim Malikov	Russian Policy toward Islamic “Sacred Lineages” of Samarkand Province of the Turkestan Governor-Generalship in 1868–1917
Danko Šipka	Tools of the Trade and Sociopolitical Micromaneuvers: A Case Study of Serbian Usage Labels
Николай Цыремпилов	«Блеск примечательной личности...». Первый бурятский ученый Доржи Банзаров в мифологических и идеологических дискурсах середины XIX — конца XX вв.
Stephen G. Wheatcroft	The Younger Lenin and Statistical Thinking before the Revolution and during the Creation of TsSU and Gosplan
Zbigniew Wojnowski	Soviet Identity Politics in Ukrainian Crimea: Friendship of the Peoples and Internal Borders in the USSR between the 1950s and the 1980s
Stefan Kirmse	In Defense of Land and Faith: Muslim Tatars between Confrontation and Accommodation in Late Imperial Russia
Elena Astafieva	Russian Orthodox Pilgrims in Jerusalem in the Second Half of the Nineteenth Century: Between the Old City and “New Jerusalem”

この他、Jasmina Gavrankapetanović‐Redžić、Robert Orttung、Max Wahlström、山崎瑤子、鈴木健太、菅井健太、高橋沙奈美各氏の書評が掲載されます。［野町］

誰が 何を どこで

2018年度の専任教員・助教・客員教員（外国人招へい教員を含まない）・非常勤研究員・学術研究員の研究成果、研究余滴のアンケート調査（提出は任意）を以下のようにまとめました（五十音順）。［宇山］

安達大輔　¶5学会報告・学術講演　▼Tchaikovsky’s *The Queen of Spades* and Attention as a Cultural Problem, HU-MSU Round Table “Russian-Japanese Cultural Dialogue,” 第1回日露大学協会総会, 札幌 (2018.5.20)　▼Russia’s Negative Landscape: Imperial Discourse, Photographic Image and Gogol’s Writing, Эмигрантология и славистика, Shanghai Normal University (2018.9.12)　▼身投げの理由：オストロフスキイ『雷雨』をセンチメンタリズム文学と比較する，日本18世紀ロシア研究会，明治大学 (2018.9.22)　▼Russia’s Negative Landscape: Imperial Discourse, Photographic Image and Gogol’s Writing, 9th Symposium on European Languages in East Asia

"Shifting Spheres of Influence: Perspectives on the Transformation of Empire(s) in East and West," National Taiwan University (2018.9.29)　▼Язык и поэтика Гоголя в трудах В. В. Виноградова по истории русского литературного языка, Rethinking the Role of Normative Grammar in Society and Beyond: Interdisciplinary Approaches (Hokkaido University - Lomonosov Moscow State University Exchange Days), Moscow State University (2018.10.10)　▼帝国の虚ろな風景：19世紀ロシア文学と否定性の実験，第28回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会，SRC (2018.12.21)　▼Emotion, Body and Subjectivity: Discourse on the Suicide's Body in Ostrovsky's *The Storm*, The Problem of Emotion in Nineteenth-Century Literature: Dostoevsky, Other Writers and Beyond, SRC (2019.3.5)

油本真理　¶1学術論文　▼An Indispensable Party of Power? United Russia and Putin's Return to the Presidency, 2011-14, *Russian Politics* 4(1):22-41 (2019)　▼The Politics of Anti-Corruption Campaigns in Putin's Russia: Power, Opposition, and the All-Russia People's Front, *Europe-Asia Studies* 71(3):408-425 (2019)　¶2その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼プーチン政権と選挙の正統性『海外事情』44-58 (2018.7-8)　（3）書評　▼Mischa Gabowitsch, *Protest in Putin's Russia* (Cambridge: Polity Press, 2017), *Acta Slavica Iaponica* 39:91-92 (2018)　▼ 図書紹介 西山美久著『ロシアの愛国主義：プーチンが進める国家統合』（法政大学出版局，2018年）『ユーラシア研究』59:69 (2019)　¶5学会報告・学術講演　▼Can an Unpopular Dominant Party Mobilize the Electorate? The Kremlin's Strategies toward United Russia in the 2010s, The 9th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, Ulaanbaatar (2018.7.1)　▼汚職防止の国際規範とロシア：公職者の資産公開制度を事例として，日本国際政治学会2018年度研究大会，大宮 (2018.11.3)

伊藤庄一　¶１学術論文　▼Japan's Opaque Energy Policy toward Russia: Is Abe Being Trumped by Putin? (Erica Downs et al., *The Emerging Russia-Asia Energy Nexus*, NBR Special Report no. 74, 33-42, Seattle: The National Bureau of Asian Research, 2018)　¶２その他業績（論文形式）（5）その他　▼プーチン大統領再選も、山積する課題 , *IEEJ Newsletter* 175:12 (2018.4)　▼世界が注目するトランプ政権の核不拡散外交 , *IEEJ Newsletter* 177:8 (2018.6)　▼さらに拍車のかかるロシアの中国シフト , *IEEJ Newsletter* 181:12 (2018.10)　▼欧米との軋轢下で深刻化する経済制裁の影響 , *IEEJ Newsletter* 183:12 (2018.12)　▼再び緊迫化するウクライナ情勢と長引く経済制裁 , *IEEJ Newsletter* 184:21 (2019.1)　▼〔識者評論〕国連日本人政務官殺害から 20 年（以下各紙掲載）:『秋田さきがけ』(2018.6.28)；『高知新聞』(2018.6.29)；『静岡新聞』(2018.6.29);『日本海新聞』(2018.6.30)；『山形新聞』(2018.6.30)；『山陰中央新報』(2018.7.1)；『岩手日報』(2018.7.2)；『佐賀新聞』(2018.7.2)　¶5 学会報告・学術講演　▼国際政治学者　秋野豊～次世代へのメッセージ～，秋野豊・元国連タジキスタン監視団（UNMOT）政務官没後 20 年シンポジウム，外務省 (2018.7.3)　▼Speech at the 2018 Energy Security Workshop: The Emerging Russia-Asia Energy Axis, The National Bureau of Asian Research, Washington, D.C. (2018.7.17)　▼ Difficulties of the Peace Process and Ways to Solve Them in Tajikistan, The Dialogue of Civilization Foundation, Dushanbe (2018.7.19)　▼Geopolitics, Energy Security, and the US-Japan, The Atlantic Council, Washington, D.C. (2019.3.20)　▼Change and Continuity in Japan-Russia Relations: Implications for the United States, The Center for the National Interest, Washington, D.C. (2019.3.20)

伊藤愉　¶5学会報告・学術講演　▼日露演劇交流史の一事例：ロシアから日本、日本からロシア，北海道スラブ研究会，SRC (2018.8.1)　▼«Зритель как лаборант: о работе Научно-

исследовательской лаборатории Государственного Театра им. Мейерхольда», Международная конференция «Лаборатория в перформативных искусствах: между метафорой и практикой», Москва, РАНХиГС, (2018.10.1)

岩下明裕　¶1学術論文　▼進化するボーダースタディーズ：私たちの現場とツーリズム『境界研究』9:91-111 (2019)　¶2その他業績（論文形式）（5）その他　▼はしがき（田村慶子他『マラッカ海峡：シンガポール、マレーシア、インドネシアの国境を行く』2-3, 北海道大学出版会, 2018）▼JR九州高速船・対馬（比田勝）から博多への混乗便に乗る, NPO法人国境地域研究センターウェブサイト (2018.12.1) <http://borderlands.or.jp/essay/essay032.html>　▼メドヴェージェフ首相が色丹に行く日『週刊金曜日』1219:23-25 (2019.2.8)　¶3著書　▼(coedited with Jusen Asuka and Jonathan Bull) *Migration, Refugees and the Environment from Security Perspectives*［スラブ・ユーラシア研究報告集 12］, 48 (SRC, 2018)　¶5学会報告・学術講演　▼ボーダーツーリズム：中露国境ツアー・トライアウト，ツーリズムEXPOジャパン，東京ビッグサイト (2018.9.21) ▼ボーダースタディーズにおける中露国境地域の意味，シンポジウム「北東アジアの鳴動」，富山大学 (2019.1.26)　▼Border Tourism in Japan Today: Development and Its Role in Remaking Borderlands, Association for Borderlands Studies Annual Convention, San Antonio (2018.4.7)　▼Featuring Borders as a New Tool beyond the Confrontation: A Tour from Japan to Russia via China, Association for Borderlands Studies Second World Conference, Vienna & Budapest (2018.7.13)　▼Border Studies Today, International Political Science Association (IPSA), Brisbane (2018.7.25)　▼Border Tourism in Northeast Asia, 北東アジア経済フォーラム，東北大学 (2018.8.10) ▼What is Border Studies? Border Studies as Theory and Practice, ボーダースタディーズ特別セミナー，韓国中央大学，ソウル (2018.11.19)　▼Eternally “Northern Territories”? The Fiasco of Abe’s Russian Policy, Aleksanteri Institute, University of Helsinki (2019.1.17)

宇山智彦　¶1学術論文　▼現代政治史：歴史的背景・ソ連の遺産と独立国家建設（宇山智彦, 樋渡雅人編『現代中央アジア：政治・経済・社会』3-29, 日本評論社, 2018）　▼中央アジア：カザフ草原とトルキスタン（小松久男，荒川正晴，岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』229-239, 242-251, 山川出版社, 2018）　▼（陳宛琳訳）中央歐亞研究對俄羅斯與後蘇聯研究之貢獻『歐亞研究』（國立中興大學國際政治研究所）3:19-31 (2018)　▼Политическая стратегия Алаш-Орды во время гражданской войны: сравнение с национально-культурной автономией тюрко-татар (*Личность, общество и власть в истории России: сборник научных статей, посвященный 70-летию д-ра ист. наук, проф. В. И. Шишкина*, 260–271, Новосибирск: Изд-во СО РАН, 2018)　▼中央アジアと中国の関係の現実的な理解のために『東亜』618:30-38 (2018)　¶2その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼ユーラシア地政学の縮図としての中央アジア『JFIR WORLD REVIEW』1:38-48 (2018)　▼進化する権威主義：なぜ民主主義は劣化してきたのか『世界』919:89-96 (2019)　（5）その他　▼〔論説〕Eurasia’s Comeback as the Pivot of the World Order: Its Meaning and Significance, *GFJ Commentary,* 79 (2018.6.22) <http://www.gfj.jp/e/commentary/180622.html>（日本語訳:世界秩序の枢軸のユーラシア回帰は何をもたらすか『e-論壇 議論百出, GFJ』2018.4.18,19 <http://www.gfj.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=3704>）　▼〔インタビュー〕Интеллигенция и демократизация в Центральной Азии: Интервью с Томохико Уямой, *Central Asian Analytical Network* (2018.4.10) <https://caa-network.org/archives/12855>　▼〔インタビュー〕話難しくなる前に撤退を（耕論：日ロ交渉の決着は?）『朝日新聞』(2019.1.24)　¶3著書　▼（樋渡雅人と共編著）『現代中央アジア：政治・経済・社会』301（日本評論社，2018）　¶

5学会報告・学術講演　▼От какого наследства мы отказываемся? Плюсы и минусы наследия советской историографии, 2nd workshop of the project “Mobilizing academic communities in Central Asia to produce new knowledge about the 1916 Uprising,” Отель Акун, Иссык-Куль (2018.7.22)　▼大国間競争と権威主義に席巻されるユーラシア：日本ができることは何か，第27回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 (2018.9.28)　▼Центральноазиатская дипломатия Японии в глобальной политике: историческая перспектива и взгляд в будущее, Институт международных отношений МИД Туркменистана, Ашхабад (2018.10.1); Назарбаев Университет, Астана (2018.10.2); Международная Тюркская академия, Астана (2018.10.3); Университет мировой экономики и дипломатии, Ташкент (2018.10.5); Узбекско-Японский Центр, Ташкент (2018.10.5); Фонд «Диалог Цивилизаций», Душанбе (2018.11.21)　▼What Promotes and Hinders Solidarity of Kindred Peoples? Kazakh Attitudes towards Other Turkic Muslims in the Late Russian Imperial and Early Soviet Periods, Workshop “Conflicting Concepts: Linguistics, Ideologies and Geopolitics in Pan-National Movements in Euroasia,” Aleksanteri Institute, University of Helsinki (2018.11.12)　▼中央ユーラシア史研究がロシア史・比較帝国論に対して持つ意義，日本中央アジア学会大会, 藤沢 (2019.3.24)

ウルフ・ディビッド（David Wolff）　¶1学術論文　▼Russia’s Eurasian Great War and Revolution: The View from Harbin (David Wolff et al., eds., *Russia’s Great War and Revolution in the Far East: Re-imagining the Northeast Asian Theater, 1914-22*, 369-401, Bloomington: Slavica, 2018)　▼(with Willard Sunderland) Introduction: The Other Side of the Map: Russia’s Great War and Revolution from a Northeast Asian Point of View (Wolff et al., *Russia’s Great War,* 1-21, 2018)　¶3著書　▼(coedited with Yokote Shinji and Willard Sunderland) *Russia’s Great War and Revolution in the Far East: Re-imagining the Northeast Asian Theater, 1914-22,* 404 (Bloomington: Slavica, 2018)　¶5学会報告・学術講演　▼In Search of Northeast Asia’s Least Common Denominator, 人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業国際シンポジウムRegional Structure and Its Change in Northeast Asia, 国立民族学博物館 (2018.9.22)　▼Risky Riches: Political Economy and Security in Northeast Asia, University of California, Berkeley (2019.3.26)

加藤有子　¶1学術論文　▼Japońskie publikacje o Zagładzie wydane po 1995 r., *Zagłada Żydow. Studia i Materiały* 14:632-647 (2018)　▼Nieznana wersja Palę Paryż Brunona Jasieńskiego (Jolanta Tanbor, ed., *Polonistyka na początku XXI wieku: Diagnozy, koncepcje, perspektywy.* Tom 1. *Literatura Polska i perspektywy nowej humanistyki,* 452-465, 2018)　▼Mains mouvantes dans *Les Carnets de Malte Laurids Brigge* de Rilke et « L’Époque de génie » de Schulz : un nouveau modèle de représentation artistique (Maougocha Smorag-Goldberg & Marek Tomaszewski, eds., *Bruno Schulz entre modernisme & modernité,* 99-111, Paris: Éditions L’improviste, 2018)　▼Motyw ręki u Schulza i Rilkego (Wiera Mieniok, ed., *Bruno Schulz a współczesna teoria kulturowa: Materiały VII Międzynarodowego Festywału Brunona Schulza w Drohobyczu,* 563-577, Drohobycz: Polonistyczne Centrum Naukowo-Informacyjne im. Igora Menioka Panstwowego Uniwersytetu Pedagogicznego im. Iwana Franki w Drohobyczu, 2018)　¶2その他業績（論文形式）（5）その他　▼ポーランドにおけるホロコーストの記憶『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』58:6-7 (2018)　▼ポーランドにおけるホロコーストの記憶：ポーランド・ユダヤ史博物館、第二次世界大戦博物館『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』59:4-5 (2018)　▼ポーランドにおけるホロコーストの記憶：ヘウムノとウーチの現在『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』60:6-7

(2018)　▼ポーランドにおけるホロコーストの記憶：ワルシャワ・ゲットー、学術界の現在『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』61:6-7 (2019)　¶3著書　▼〔翻訳〕デボラ・フォーゲル『アカシアは花咲く』松籟社 (2018)　¶5学会報告・学術講演　▼デボラ・フォーゲル『アカシアは花咲く』をめぐって，シンポジウム「ポーランド文学の多様性」東京大学 (2019.3.21)　▼Mapa i znaczki: Czytanie Schulza polstkolonialne, Bruno Schulz: filozofia, poetyka i inne perspektywy miejsca, Drohobycz, Ukraine (2018.6.5)　▼1930年代ポーランドのユダヤ系前衛作家の共通言語／普遍言語の探求：デボラ・フォーゲルとブルーノ・シュルツ，シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」東京大学 (2018.10.6)　▼普遍言語の探求：両大戦間期ポーランド前衛文学の複数言語使用の作家たち：ポーランド未来派ブルーノ・ヤシェンスキの「ヨーロッパ」と言語，ロシア東欧学会第47回研究大会，神戸大学 (2018.10.20)　▼〈ヒロシマ・アウシュヴィッツ〉のレトリックを超えて，国際シンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶ホロコーストと原爆を起点とする比較的アプローチ」，名古屋 (2018.11.17)

加藤美保子　¶1学術論文　▼ロシアのアジア重視の三つの波と日露関係『ユーラシア研究』59:17-22 (2019)　▼地域秩序から考える「太平洋のロシア」『神奈川大学アジア・レビュー』6:50-58 (2019)　¶2その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼第三期プーチン政権の北東アジア政策の評価『ボストーク』33:2-4 (2018)　¶5学会報告・学術講演　▼北東アジアの国際関係から考える日本とロシアの選択肢，ユーラシア研究所第30回総合シンポジウム「アジアの中の日露関係」，聖心女子大学 (2018.7.14)　▼Russia's View on Sovereignty and the Territorial Issues in East Asia, Association for the Borderlands Studies World Conference 2018, Vienna (2018.7.11)　▼プーチン時代の対北朝鮮政策：軌跡と展望，NIHU基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」／北東アジア学会連携シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」，富山大学 (2019.1.26)

菊田悠　¶1学術論文　▼Mobile Phones and Self-determination among Muslim Youth in Uzbekistan, *Central Asian Survey* 38(2):181-196 (2019)　▼労働移民の社会的影響：移動と送金がもたらす変化（宇山智彦，樋渡雅人編『現代中央アジア：政治・経済・社会』257-279，日本評論社，2018）¶2その他業績（論文形式）（5）その他　▼ウズベキスタンのリシトン陶業における19世紀末以降の技術変化と集団接触（野林厚志編『パレオアジア文化史学　新学術領域研究計画研究B01班2018年度研究報告』17-22，国立民族学博物館，2019）　▼人々のなかのイスラーム；職人の世界ー陶業；陶芸交流から日本語学校へー日本語の通じる町リシュタン（帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』165-169, 181-184; 371-375, 明石書店，2018）　¶5学会報告・学術講演　▼中央アジア発の労働移民がもたらす社会変化：ケータイと若者の意識を中心に，Tsukuba Global Science Week 2018, 筑波大学 (2018.9.21)

後藤正憲　¶2その他業績（論文形式）（5）その他　▼地球の鼓動を聞く：東シベリア・サハの牧畜を通して『北海道立北方民族博物館友の会季刊誌　アークティック・サークル』109:4-9 (2018)　¶5学会報告・学術講演　▼複層的な自然：中央ヤクーチアにおける環境と経済の相互作用, 日本文化人類学会第52回研究大会, 弘前大学 (2018.6.2)

斎藤慶子　¶1学術論文　▼Влияние методики Агриппины Вагановой на развитие искусства балета в Японии (*IV Вагановские чтения. Материалы международной научно-практической конференции (23-24 мая 2018 года),* 89-102, СПб.: Академия Русского балета имени А.Я.

Вагановой, 2018)　▼Постановки балетов Петипа и изучение его творчества в Японии на примере труппы «Токио балет имени Чайковского» (*Мариус Петипа на мировой балетной сцене: Материалы международной конференции*, 63-73, СПб.: Санкт-Петербургский государственный музей театрального и музыкального искусства, 2018)　¶2その他業績（論文形式）（2）研究ノート等　▼〔資料紹介〕小牧正英の師「キャトコフスカヤ」の履歴：白系露人事務局資料を元に『舞踊學』41:12-17 (2019)　（5）その他　▼〔博士学位論文〕日本バレエ教育史における転換点：チャイコフスキー記念東京バレエ学校（1960-1964）とソヴィエト・バレエ（博士（文学）取得，早稲田大学，2019.1.16）　¶5 学会報告・学術講演　▼Русское влияние на развитие профессионального балета в Японии, IV международные вагановские чтения, Академия Русского балета имени А.Я. Вагановой, Санкт-Петербург (2018.5.23)　▼Borders in musical arts: a comparison of the cases of the Tchaikovsky Memorial Tokyo Ballet School and the West-Eastern Divan orchestra, Association for Borderlands Studies Second World Conference, Vienna (2018.7.10)　▼Современное состояние балетов Петипа и изучения его творчества в Японии на примере труппы «Токио балет имени Чайковского», Международная научная конференция «Мариус Петипа на мировой балетной сцене», Санкт-Петербургский государственный музей театрального и музыкального искусства (2018.11.17)　▼Старинные японские песни в русском балете конца 19 века на примере балета “Даита” (1896, Г.Э. Конюс), Развлечение и искусство в России: от XVII века до конца империи, Государственный институт искусствознания, Москва (2018.11.22)

仙石学　¶1学術論文　▼2017年チェコ下院選挙（『混迷する欧州と国際秩序（平成29年度外務省外交・安全保障調査研究事業委託報告書）』65-75, 日本国際問題研究所, 2018）　▼東欧の混迷と分断：EUとロシアの間で（『混迷する欧州と国際秩序（平成30年度外務省外交・安全保障調査研究事業委託報告書）』53-63, 日本国際問題研究所, 2019）　¶2その他業績（論文形式）（5）その他　▼The Baltic States and Japan: What, if any, are the possibilities of further cooperation? *Baltic Rim Economies* 2:35 (2018)　¶5学会報告•学術講演　▼ “Re-transformation” of East European welfare states? Changing of the family policy after the economic crisis, The 16th ESPANET Conference 2018, Vilnius University (2018.8.31)

高橋沙奈美　¶1学術論文　▼ボリシェヴィキの対ロシア正教会政策とその帰結：国教関係、教会外交、「生きた宗教」『ロシア史研究』101:47-60 (2018)　▼北ロシアにおける聖地と文化遺産（杉本良男，松尾瑞穂編『聖地のポリティクス：ユーラシア地域大国の比較から』115-146，風響社，2019）　¶2その他業績（論文形式）（2）研究ノート等　▼Профессор Тацуо Нагаи и его экспертиза ДНК Романовых (*Шестнадцатые Романовские чтения*. Екатеринбург: Изд-во Квадрат, 264-270, 2018)　（3）書評　▼三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会：研究案内と基礎データ』（明石書店，2017）『境界研究』9:129-134 (2019)　（5）その他　▼博士論文を学術書にする（高橋沙奈美『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観』受賞記念トークイベント講演録）(2018.12.18) <http://hup.gr.jp/modules/xfileuploader/upload/img/up036.pdf>　¶5学会報告・学術講演　▼Русское зарубежье и вопрос прославления Царской семьи: Из материалов синодального архива Русской Православной Церкви Заграницей, Романовские чтения: Всероссийская научно-практическая конференция, Екатеринбург-Алапаевск (2018.7.19)　▼皇帝が捧げた命：在外ロシア正教会におけるニコライ二世の表象，ロシア史研究会2018年度大会共通論題A，首都大学東京 (2018.10.13)　▼Affirmation of Russian Identity in the Diaspora: The

Glorification of the Russian Imperial Family in the Russian Church Abroad, ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) 50th Annual Convention, Boston (2018.12.7)

ダダバエフ・ティムール（Timur Dadabaev） ¶1学術論文 ▼Uzbekistan as Central Asian Game Changer: Uzbekistan's Foreign Policy Construction in the Post-Karimov Era, *Asian Journal of Comparative Politics* 4(2):162-175 (2018) ▼Japanese and Chinese Infrastructure Development Strategies in Central Asia, Japanese Journal of Political Science 19(3):542-561 (2018) ▼Chinese Economic Pivot in Central Asia and Uzbekistan's post-Karimov Re-emergence, *Asian Survey* 58(4):747-769 (2018) ▼Discourses of rivalry or rivalry of discourses: Discursive strategies of China and Japan in Central Asia, *The Pacific Review*, online:1-35 (2018) <https://doi.org/10.1080/09512748.2018.1539026> ▼Afghanistan: Changes and Shifts in Domestic, Regional and Global Dynamics, *Asian Survey* 59(1):114‐123 (2019) ▼Central Asia: Japan's New "Old" Frontier, *Asia Pacific Issues* 186:1-11 (2019) ¶2その他業績（論文形式）（5）その他 ▼Japan Attempts to Crack the Central Asian Frontier, *Asia Global Online* (2018.8.30) <https://www.asiaglobalonline.hku.hk/japan-central-asia-uzbekistan-kazakhstan/>

田畑伸一郎 ¶1学術論文 ▼（梶谷懐，福味敦と）ロシア，中国，インドの中央・地方財政関係の比較『比較経済研究』56(1):1-16 (2019) ▼低成長に留まるロシア経済：2017年マクロ実績の分析『ロシアNIS調査月報』63(5):1-23 (2018) ¶2その他業績（論文形式）（5）その他 ▼（本村真澄と）資源開発へのインパクト（北極域研究推進プロジェクト事務局編『これからの北極』27-35，2019） ▼ロシア北極域の経済発展を考える」（日本極地研究振興会メールマガジン16，2019.1.25） ¶5学会報告・学術講演 ▼Flow of financial resources between the Center and Arctic regions in Russia, ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) 50th Annual Convention, Boston (2018.12.6) ▼Financial Sustainability of the Arctic Regions in Russia, UArctic Congress, University of Oulu (2018.9.5) ▼（梶谷懐, 福味敦, 佐藤隆広と）ユーラシア地域大国の中央・地方財政関係, 比較経済体制学会第58回全国大会, 北海道大学 (2018.6.9)

徳永昌弘 ¶1学術論文 ▼（菅沼桂子, 小田桐奈美と）From Russia to Eurasia: Specific Features of the "Russosphere" from the Perspective of Business Activities of Japanese Firms, *RRC Working Paper Series* 77:1-57 (2018) <http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/29444/1/RRC_WP_No77.pdf> ▼（菅沼桂子と）日系企業のロシアビジネス：概観と検証『ロシアNIS調査月報』63(9/10):42-61 (2018) ▼（岩﨑一郎と）市場経済移行と外国直接投資(FDI)：FDI決定要因の比較分析（岩﨑一郎編著『比較経済論講義：市場経済化の理論と実証』419-462，日本評論社，2018） ▼体制転換と環境改革：中東欧諸国を中心に（岩﨑編著『比較経済論講義』463-503） ¶2その他業績（論文形式）（3）書評 ▼岩﨑一郎，菅沼桂子著『新興市場と外国直接投資の経済学：ロシアとハンガリーの経験』（日本評論社，2014）『比較経済体制研究』24:81-85 (2018) ¶5学会報告・学術講演 ▼（菅沼桂子と）ロシア市場からユーラシア市場へ：日系企業の事業展開から見た「ロシア語圏市場」の特徴，比較経済体制学会第58回全国大会，北海道大学 (2018.6.10)

兎内勇津流 ¶2その他業績（論文形式）（4）翻訳 ▼セルゲイ・イリッチ・クズネツォフ「モンゴルにおける日本人抑留者 1945-1947年」『北方人文研究』12:155-165 (2019) （5）その他 ▼シベリア「出兵」を問い直す『歴史地理教育』880:18-23 (2018) ▼小規模図書館奮戦記 その255 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター図書室『図書館雑誌』112(9):633 (2018) ▼IFLA先

住民部会参加記『むすびめ2000』104:14-16 (2018)　▼（及川琢英と）立花小一郎とその日記について（資料紹介），立花小一郎回顧余録大正8年10-11月（翻刻）『近現代東北アジア地域史研究会Newsletter』30:38-56 (2018)　¶5学会報告・学術講演　▼IOM所蔵出版物に見る明治期日本の正教会，日露国際研究集会「コレクション形成からみる日露関係史II」, 北海道大学 (2018.6.3)　▼ロシア・ソ連の史料・文献に見るソ連の南サハリン統治（1945-1950），日本植民地研究会第26回全国研究大会共通論題，北海学園大学 (2018.7.15)　▼ヴァシーリー・ボルディレフと日本軍，ロシア史研究会第62回大会, 首都大学東京 (2018.10.14)

長縄宣博　¶1学術論文　▼「ロシア・ムスリム」の出現（小松久男編『1905年：革命のうねりと連帯の夢（歴史の転換点10）』92-145,山川出版社，2019）　▼Designs for *Dâr al-Islâm*: Religious Freedom and the Emergence of a Muslim Public Sphere, 1905-1916 (Randall A. Poole and Paul W. Werth, eds., *Religious Freedom in Modern Russia,* 160-181, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2018)　¶2その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼ヴォルガ・ウラル地方（小松久男，荒川正晴，岡洋樹編『中央ユーラシア研究入門』221-229，山川出版社，2018）（3）書　評　▼Charles Steinwedel, *Threads of Empire: Loyalty and Tsarist Authority in Bashkiria, 1552-1917* (Bloomington: Indiana UP, 2016), *Cahiers du Monde russe* 59(4):611-615 (2018)　（5）その他　▼〔事典項目〕Маулид ан-Наби; Султанов Мухаммадьяр; ал-Чистави (*Ислам на территории бывшей Российской империи: Энциклопедический словарь* 2:248-250; 348-349; 432-433, M., 2018)　¶5学会報告・学術講演　▼What a Muslim Region of Imperial Russia Tells; Writing a Transnational History of Russia's Civil War, International Laboratory "Russia's Regions in Historical Perspective," Higher School of Economics in Moscow (2019.3.15,22)　▼Tatars at Imperialist Wars: From the Tsar's Servitors to the Red Warriors, ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) 50th Annual Convention, Boston (2018.12.7)　▼О роли Приволжской татарской стрелковой бригады в большевистском завоевании Средней Азии, Islam in Central Eurasia (Dedicated to the Memory of Professor Dmitrii Iur'evich Arapov), Hokkaido University - Lomonosov Moscow State University Exchange Days, Moscow (2018.10.10)　▼Всеобщая воинская повинность как фактор трансформации мусульман Поволжья и Приуралья на рубеже XIX-XX вв., Религиозная (не)терпимость в Российской империи, Назарбаев университет, Астана (2018.10.6)　▼Превращая гражданскую войну в революцию Востока: Карим Хакимов из Средней Азии на Красное море, Памятная встреча «Жизнь – преодоление», посвященная Кариму Абдрауфовичу Хакимову, советскому дипломату, первому полномочному представителю Советской России в арабских странах, Оренбург (2018.6.22)

野町素己　¶1学術論文　▼Is the Kashubian numeral *jeden* 'one' an indefinite article? (Marija Džonova, ed., *Sbornik s dokladi ot trinadesetite meždunarodni slavistični četenija: Jubilejna naučna sesija v čest na prof. Ruselina Nicolova*, 140-149, Veliko Tarnovo: Faber, 2018)　▼Dynamika sytuacji kaszubszczyzny w ujęciu teorii emancypacji językowej (Jolanta Tambor, ed., *Polonistyka na początku XXI wieku. Diagnozy Koncepcje Perspektywy*, 71-82, Katowice: Wydawnictwo Uniwersytetu Śląskiego, 2018)　▼The Gorani people in search of identity: the current sociolinguistic situation among the Gorani community of the former Yugoslavia (Aleksandr D. Duličenko and Motoki Nomachi, eds., *Slavjanskaja mikrofilologija*, 375-412, SRC, 2018)　¶3著書　▼(Aleksandr D. Duličenkoと共編著) *Slavjanskaja mikrofilologija* (SRC, 2018)　¶

5学会報告・学術講演　▼Evolution of the Kashubian Indefinite Marker (Compared to Other High-Contact Slavic Languages), BASEES 2018 Annual Conference, Cambridge (2018.4.15)　▼The Breakup of Serbo-Croatian and the Gorani of Kosovo, Modern History Research Seminar, School of History at University of St Andrews (2018.4.17)　▼The Kosovan Gorani Ethnolect: A Borderland Enclave in Search of Linguistic Identity; Language Emancipation of Slavic Literary Microlanguages, School of International Letters and Cultures at Arizona State University (2018.4.25,26)　▼Academician Samuil B. Bernštejn on the Macedonian Literary Language: A Long-Shelved Discussion Rediscovered, Makedonistički denovi vo MANU, Skopje (2018.5.17)　▼(with Aleksandra Salamurović) Glagolitic Script in Contemporary Croatia: A Sociolinguistic Study, 21st Biennial Conference on Balkan and South Slavic Linguistics, Literature and Folklore, Montana State University Billings (2018.5.25)　▼(with Aleksandra Salamurović) Attitude towards Script and Script Revitalization: The Case of Glagolitic, CLARC 2018: Perspectives on Linguistic Diversity, Rijeka (2018.6.9)　▼Dlaczego mnie interesują małe języki słowiańskie, zwłaszcza kaszubski?, Zespół Kształcenia i Wychowania w Kamienicy Szlacheckiej, Kamienica Szlachecka (2018.6.12)　▼Czy kaszubszczyzna została emancypowana?, Debata pt. „Języki narodowe Europy Środkowej i Południowej: Globalizacja, Ideologia, Tożsamość“, Poznań (2018.6.13-14)　▼The Characteristics of an Indefinite Marker in Burgenland Croatian from a Typological Perspective, XVI International Congress of Slavists, Belgrade (2018.8.21)　▼Šta je slovenska mikrofilologija?, Sednica međunarodne komisije za proučavanje slovenske frazeologije, Belgrade (2018.8.25)　▼(with Yaroslav Gorbachov) Evolution of Existential Clauses in Polish: Historical and Typological Accounts, Slavic Linguistics Society Annual Conference, Eugene (2018.9.29)　▼分裂と統合のジレンマ：カシュブ文学の事例より，シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作を巡る求心力と遠心力」，東京大学 (2018.10.6)　▼Об одной неопубликованной грамматике македонского литературного языка, Hokkaido University - Lomonosov Moscow State University Exchange Days, Moscow (2018.10.10)　▼(with Aleksandra Salamurović) Glagolitic Script in Media: Something Old, Something New, Interdisziplinäres Symposium „Von der Wiederholung zum Ritual. Rezente Prozesse in den Sprachen und Kulturen südosteuropäischer Gesellschaften“, Berlin (2018.11.2)　▼If it were not for the Tito-Stalin Split…Samuil B. Bernštejn's unrealized version of the Macedonian Literary Language, Slovanský ústav AV ČR, Prague (2018.11.5)　▼「ポーランドなくしてカシュブなし、カシュブなきポーランドなし」再考：今日のカシュブ人の言語とアイデンティティを巡って，ポーランド独立回復100周年記念国際学会2018，城西大学 (2018.11.17)　▼О новой залоговой конструкции в кашубском языке в контексте языкового контакта, Круглый стол по диалектологии XXII «Славянские диалекты в условиях межэтнического пограничья», Moscow (2018.11.21)　▼(with Aleksandra Salamurović) Script Revitalization? Reemergence of Old Scripts among South Slavs, SRC 2018 Winter International Symposium “Languages Rising above Empires, Blocs, and Unions 1918-2018,” SRC (2018.12.13)　▼Grammatical Change in Kashubian as a Reflection of Sociolinguistic Change, Symposium “Languages Rising above Empires” (ditto) (2018.12.14)　▼Об одном общем синтаксическом изменении в западнославянских языках, Slavic Linguistic Seminar at the Institute for Slavic Studies at the Russian Academy of Sciences, Moscow (2019.1.15)

ビタバロヴァ・アセリ（Assel Bitabarova） ¶1学術論文 ▼Unpacking Sino-Central Asian engagement along the New Silk Road: a case study of Kazakhstan, *Journal of Contemporary East Asia Studies* 7(2):149-173 (2018) ¶5学会報告・学術講演 ▼Brokers of the 'New Silk Road'? A Case Study of Kazakhstani Dungans, International Symposium "Ethnicities in China and Their Interaction with Global Society in the Era of BELT and ROAD," 早稲田大学 (2018.11.4) ▼中央アジアにおける新シルクロード構想の具体化に向けて：中国・カザフスタン関係を中心に, 北海道中央ユーラシア研究会第132回例会，SRC (2018.12.18)

ブフ・アレクサンダー（Alexander Bukh） ¶1学術論文 ▼Japan's Territorial Disputes and Policy: Success of Failure? (Mary M. McCarthy, ed., *Routledge Handbook of Japan's Foreign Policy,* 188-201, Oxon: Routledge, 2018) ¶5学会報告・学術講演 ▼21世紀の世界文化と韓国文化, 韓国文化のグローバル化に関する国際セミナー, 大邱慶北研究院, 安東市 (2018.10.18)

ブル・ジョナサン（Jonathan Bull） ¶1学術論文 ▼Karafuto Repatriates and the Work of the Hakodate Regional Repatriation Centre, 1945-50, *Journal of Contemporary History* 53(4): 788-810 (2018) ¶5学会報告・学術講演 ▼Karafuto Repatriates and 1950s Hokkaido, Association for Asian Studies Annual Conference, Denver (2019.3.24)

松澤祐介 ¶1学術論文 ▼EUの東方拡大と運輸・交通サービス⑵：スロバキアの旅客鉄道改革『西武文理大学サービス経営学部研究紀要』33:33-45 (2018) ¶5学会報告・学術講演 ▼中欧諸国のネオリベラリズム，比較経済体制学会第58回全国大会，北海道大学 (2018.6.9) ▼Rail Passenger Market Development in Central Europe, 15th European Association for Comparative Economic Studies Conference, Warsaw School of Economics (2018.9.8)

村上智見 ¶2その他業績（論文形式）（5）その他 ▼シタデルを覆う火災層の調査：ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2018年）（『第26回西アジア発掘調査報告会報告集 平成30年度 考古学が語る古代オリエント』51-55, 2019） ¶5学会報告・学術講演 ▼中央ユーラシア出土品から見た古代の染織文化，北海道スラブ研究会，SRC (2018.6.6) ▼カフィル・カラ遺跡出土ゾロアスター教木彫板に見られる人物の服飾，内陸アジア史学会大会，日本大学 (2018.11.10) ▼Ancient Textiles Unearthed from the Tombs of the Turkic Period in Mongolia, The British Museum Mellon Symposia "Textiles from the Silk Road in Museum Collections Scientific Investigations and Conservation Challenges," British Museum (2018.12.10) ▼シタデルを覆う火災層の調査：ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2018年），西アジア発掘調査報告会，池袋サンシャインシティ文化会館 (2019.3.23) ▼グリ・アミール廟出土染織品の研究, 日本中央アジア学会大会, 藤沢 (2019.3.24)

森下嘉之 ¶1学術論文 ▼「ヒトラーの新秩序」とその後がもたらした地域社会の変容：チェコ工業都市オストラヴァを事例に（1938-1948年）『歴史と経済』60(3):12-21 (2018) ¶2その他業績（論文形式）（2）研究ノート等 ▼〔資史料紹介〕（水野（角田）延之，春山雄紀と）旧時代のフランスと革命における国家統一連邦主義（1928/1989）『ENSG エスニック･マイノリティ研究』2:21-40 (2019) ¶5学会報告・学術講演 ▼ポスト社会主義期のチェコにおける集合住宅（パネラーク）の歴史認識，エスニック・マイノリティ研究会ワークショップ「風景・景観の改変と地域社会の変化」, 国立政治大学, 台北 (2018.8.20)

みせらねあ

◆　センターの役割分担　◆

2019年度のセンター教員の役割分担は以下の通りです。［仙石］

センター長	仙石
副センター長	田畑
拠点運営委員会委員	岩下・宇山・仙石・田畑・野町
【学内委員会等】	
教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会	仙石
教務委員会	仙石
図書館委員会	岩下
国際担当教員	ウルフ
欧州ヘルシンキオフィス所長	田畑
RJE3 学内運営委員会	田畑
低温科学研究所拠点運営委員会	仙石
北極域研究センター運営委員会	田畑
男女共同参画委員会	仙石
社会科学実験研究センター運営委員会	田畑
北方生物圏フィールド科学センター運営委員会	田畑
サステナブルキャンパス推進員	安達
ハラスメント予防推進員	岩下
広報担当者	野町
【学外委員会等】	
国立大学附置研究所・センター会議	仙石
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会	仙石
JCREES 事務局	仙石・諫早
地域研究コンソーシアム理事	仙石
地域研究コンソーシアム運営委員	安達
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員	宇山

京都大学東南アジア地域研究研究所運営委員	岩下
ICCEES 情報	野町
【センター内部の分担】	
大学院講座主任・研究室主任	宇山
教務委員	長縄
入試委員	長縄
総合特別演習担当	（前期）宇山　（後期）仙石
全学教育科目責任者	長縄
全学教育科目総合講義	長縄
全学教育科目演習	安達
将来構想	岩下・宇山・田畑・長縄・野町
点検評価	田畑・長縄
夏期シンポジウム	宇山・仙石・諫早・斎藤＊
冬期シンポジウム	長縄・諫早・斎藤＊
図書	岩下・兎内
情報・広報	野町・諫早・大須賀
予算	田畑
共同利用・共同研究公募	田畑
客員教員	田畑
外国人研究員プログラム	宇山・ウルフ・大須賀
ドブレンコ (2019.9.1-12.27)	安達
ゴルバチョフ (2019.9.10-2020.3.27)	野町
ガリポヴァ (2019.9.1-12.27)	長縄
コロリョフ (2019.9.1-12.27)	宇山
ルービンス (2020.1.1-3.27)	安達
非常勤研究員	岩下
中村・鈴川基金	岩下
公開講座	野町・伊藤＊
公開講演会	長縄・諫早・斎藤・伊藤・村上・大須賀

専任研究員セミナー (助教・非常勤研究員セミナーを含む)	田畑
その他研究会・講演会	安達・諫早・斎藤・伊藤・村上・大須賀
研究所一般公開	高橋・諫早・村上＊
サマーインスティチュート	加藤
博物館	加藤
NIHU 北東アジア（NIHU セミナー、HP、オンライン報告書）	加藤
UBRJ（HP、『境界研究』、Eurasia　Border　Review）	岩下・斎藤
その他諸行事企画	安達・諫早・伊藤・斎藤・村上
雑誌編集委員会	安達・宇山・ウルフ・長縄・野町
Acta Slavica Iaponica	野町・ウルフ・大須賀
『スラヴ研究』	長縄・大須賀
スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集	安達・大須賀
ニューズレター和文　（メルマガ・HP コンテンツ）	宇山（・仙石）・大須賀
ニューズレター欧文　（メルマガ・HP コンテンツ）	ウルフ（・仙石）・大須賀

＊非常勤研究員・学術研究員 3 人で担当するなかでの代表者を示す。3 名の名前がある場合は輪番制。

◆　専任研究員消息　◆

ウルフ・ディビッド研究員は、2月19～24日の間、“Resources, Environment and Infrastructures between Russia and the Asia-Pacific: Cooperation and Conflicts” 出席・討議および研究打合せのため、韓国に出張。3月1～7日の間、資料収集のため、ロシアに出張。3月16～29日の間、“Entangling the Pacific and Atlantic Worlds: Past and Present” 出席のため、米国に出張。4月24日～5月8日の間、“Global Conversations: Cross-Fertilization of Knowledge in the Making of the Modern World” 出席•研究報告および研究打合せ、講演、資料収集のため、ドイツに出張。6月2日～14日の間、資料収集のため、米国に出張。

田畑伸一郎研究員は、2月27日～3月21日の間、ヘルシンキオフィス管理・運営業務等および国際会議「日本とロシア：アジア太平洋地域における互恵的協力」出席・意見交換のため、フィンランド、ロシアに出張。5月20～30日の間、“The Arctic Science Summit Week (ASSW) 2019” 出席・研究報告・意見交換および聞き取り・資料収集のため、ロシアに出張。

野町素己研究員は、3月18～30日の間、テルアビブ大学、ネケブ・ベングリオン大学にて資料収集およびロシア学士院スラブ学研究所にて研究報告のため、イスラエル、ロシアに出張。5月18～27日の間、大学間協定関連の研究打合せ、ICCEES幹部会についての打ち合わせ・幹

部会出席およびICCEES関連の研究打ち合わせのため、カナダに出張。6月6～20日の間、研究打合せおよびアダムミツキェヴィッチ大学主催講演会にての講演、記念論集関連イベントへの参加のため、ポーランドに出張。

安達大輔研究員は、3月27日～4月8日の間、資料収集および学会「第14回ゴーゴリ読解」出席のため、ロシア、ウクライナに出張。

岩下明裕研究員は、4月23～28日の間、研究打ち合わせおよび国際会議ABS 2019 Annual Conference出席、成果報告のため、米国に出張。

宇山智彦研究員は、5月28日～6月3日の間、国際会議 “The 1916 Uprising in Central Asia: Academic Integration, New Approaches and Knowledge” 出席のため、クルグズスタン（キルギス）に出張。

長縄宣博研究員は、6月9～21日の間、国際会議「ロシアの内戦：軍事的試練と社会実験の時代の生活　1917－1922年」出席・研究成果報告および資料調査・研究打ち合わせのため、ロシアに出張。

＊「人物往来」の掲載は休止します。

目　　次

研究の最前線 ……1
2019年度夏期国際シンポジウム「民主主義の世界的危機？ 権威主義とポピュリズムの台頭と進化」開催／公開講座「再読・再発見：スラブ･ユーラシア地域の古典文学と現代」開講／センター一般公開開催される／長縄宣博教授が第8回三島海雲学術賞を受賞／「ブリティッシュ・コロンビア大学との交流事業」によりロシア文学の国際シンポジウムを開催／ ICCEES副会長アンドリイ・クラフチュク氏のSRC訪問／共同研究員／ 2019年度中村・鈴川基金奨励研究員決まる／ 2019年度科学研究費プロジェクト／専任研究員セミナー／研究会活動

人事の動き ……12
助教の就任・退職／学術研究員紹介／ 2019年度外国人招へい教員（外国人研究員）決定／ 2019年度の客員教授・准教授／事務職員の異動

札幌に７か月滞在して ……14
by トマシュ・ヴィヘルキェヴィッチ

サラ・トマソン教授による連続講義について ……18
by 野町素己

学界短信 ……20
第14回ゴーゴリ研究会（ポルタワ）に参加　by 安達大輔
M.E.S.S. 2019 “Religions in Mongol Eurasia” 参加記　by 諫早庸一
学会カレンダー

大学院だより ……25
大学院の改組と院生の入学・修了状況
地図の勉強会を振り返って　by 寺岡郁夫
“スラ研” と私　by 大武由紀子
私の大学院生活を振り返って　by 谷原光昭

図書室だより ……32
「樺太・千島戦争体験の絵」をNHK札幌放送局から受贈／雑誌総目次データを作成・提供

編集室だより ……33
『スラヴ研究』／ *Acta Slavica Iaponica*

誰が 何を どこで ……34

みせらねあ ……44
センターの役割分担／専任研究員消息

2019 年 7 月 31 日発行
編集　宇山智彦
DTP 編集　ささやめぐみ
発行者　仙石　学
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/